保健と
趣味的な仙台の遊覽地と温泉

549
396
549-396
1200501507551

保健と
趣味的な

仙臺の遊覽地と溫泉

帝國圖書館藏

保健と
趣味的な

仙臺の遊覽地と溫泉

昭和三・五・一八 帝國圖書館

549-396

序

旅をするといふことは、人生の旅路を一歩々々、一日々々と歩むに似たものである。それが健全で趣味的であればある程、其人生が幸福である樣に、旅行も亦健全で趣味的であることは誰しもの望むところである。職業上旅をする人にしても、汽車、汽船や他の乘物、行先の旅宿、土地の人情、風俗、氣候、風物等みな日常生活圏外のものである時には、興もあり味ひも多いもの、況してや趣味の旅保健の旅に赴く人においては、一層の興趣をそゝらるゝことは言を俟つまでもないことである。

此の小冊子は、仙臺附近の名勝温泉を誌したものであるが、案内記或は報告書的な煩をさけて、行途と環境を記すことに努め、自然の恵む其土地々々の特色の露はるゝことを期した。乘物の便、不便、或は其所要時間、經費なども出來るだけは書いた。旅宿の工合、經費なども大略は書いたつもりである。又仙臺地方の自

然の色合の中に、名勝、史蹟、温泉等が、どんな工合に織り込まれてゐるか、そして、それが、保健的に、趣味的に、どう味はゝれるか、これも絶えず編者の念頭にあつたものである。幸に、此冊子によつて、味深く興多き仙臺の風物が、誤たれなければ至幸此上なきもの、更に眞實境を味得して貰へれば望外の幸である。

昭和三年四月二十五日

編者

保健と趣味的な

仙臺の遊覽地と溫泉

目次

序……一

汎仙臺の鳥瞰……一

奥羽脊稜——山脈河川湖沼地帶——海岸、本石米、應揚で不規律な性格、多種多樣な溫泉、名勝——東北に咲いた桃山時代の遺物。

仙臺市……四

千體佛——千代——仙臺、眺望、政宗の遺業。

〔仙臺南部〕……八

櫻ヶ岡(西公園)、瑞寶殿、愛宕山、孝勝寺、宮城野、國分寺趾、榴ヶ岡(東公園)

〔仙臺北部〕 東照宮、支倉六右衞門の墓、青葉神社、林子平の墓、大崎八幡神社、養賢堂、芭蕉の辻、郊外の舊蹟、多賀城址、蒙古碑、末の松山、旅館と土產物。

松島……一四
交通機關、扶桑第一の好風、松島の觀方、瑞巖寺、桃山時代の好遺物、觀瀾亭、五大堂、西行戻りの松、雄島。
雁金森へ登る……二一
是非行くべきところ、眼界四方に開く大山水圖。
松島四大觀……二三
扇谷――幽觀、富山――麗觀、多聞山――美觀　大鷹森――壯觀。
（周圍六里半の宮戸島、漁農二百餘戸の別天地）
松島八崎、松島八景、鹽松八景、灣内の釣魚、島の茸狩。
（宮城縣選定の遊覽順序、一日、二日、三日、四日の場合）
水旅館、遊覽地、不老山の勝景、旅館と土産物
鹽釜……二九
附近諸勝、鹽釜神社、御釜神社、牛石神社、旅館と土産物。
金華山……三一

道二つ、陸路と海路、陸路道順、海路順、船路と汽船、金華山參詣、參詣日程、第一、第二、第三、第四法、一日、二日の場合、案内料　献膳料、御符と掛守。
不忘山麓の温泉……四一
名を忘れずの山のほとり、交通、水密と梨畑の間を行く。
遠刈田温泉……四三
松川と七日原の大斜線、泉質と効能、旅館と土産物。
青根温泉……四四
乗りものと道中、大自然　靈氣、二千四百尺から朝暾を、口碑、泉質と効能、旅館と土産物。
峨々温泉……四九
どう行く、泉質と旅館と經費。
不忘の峻嶺……五〇
位置と交通、睡眠複火山、スロープ、かながら佛、賽の河原、頂上。
不忘南麓の温泉……五三
どう行くか

小原温泉……五四
落花を食む初魚の飛踊、泉質と旅宿、附近の名所奇觀。
鎌先温泉……五六
縣道をすべりて、山上に繪卷物を、泉質と旅館土產物。
仙臺鐵道に沿ふて……五九
堤燒、山ノ寺洞雲寺、内藤以貫の墓、七ツ森、臺ヶ森鑛泉。
定義温泉……六二
定義如來、泉質と旅館。
作並温泉……六三
百八十段の長廊下、泉質と旅館。
秋保温泉……六五
秋保電車、傳說、泉質と旅館。
玉造五湯と荒雄川……六七
名馬池月の產地

川渡温泉……六九
脚氣川渡、泉質と旅館。
鳴子温泉……七〇
五湯と附近、湯元と泉質、旅館。河原湯と泉質、旅館。多賀と泉質、旅館。新車と泉質、旅館。元車と泉質、旅館。
赤湯温泉……七四
三條山のほとり、泉質と旅館、經費。
新赤湯……七六
泉質と旅館。
田中、新田中温泉……七七
どう行くか、泉質と旅館　土產物。
荒雄川の上流……七七
花淵山——尿前關址　——中山温泉。
轟温泉……七九

泉質と泉主
吹上間歇泉……八〇
自然堀の凹所に浸る、泉質と泉主。
栗駒五湯の一……八一
駒の湯溫泉、山を登りて、泉質と旅宿。
栗駒五湯の二……八二
溫湯、湯の倉、湯濱の泉質、旅宿。
須川溫泉……八三
位置と交通、嚴美溪　泉質と旅宿、經費。
平泉のほとり……八四
憶ひは八百年の昔へ、毛越寺、達谷窟、中尊寺へ、無量光院址、鈴澤の池、猫間淵址、柳の御所址、判官館。
中尊寺……八八
金色堂、經藏、拜觀料。
猊鼻溪……九二

汎仙臺の鳥瞰

扶桑第一の好風松島に配する桃山建築の莊麗、平安時代の光華燦たる平泉の遺趾、不忘山麓の青根温泉の明光等を探る前に、先づ仙臺六十二萬石封内の狀勢を瞥見してみたい。

仙臺といふ言葉に抱括さるゝところは、現在宮城縣廳のある仙臺市のみでなく、郡部は勿論、仙臺舊封域の岩手縣南の五郡も含めらるゝことが多い。本書に仙臺の名をとつたのは前述の汎仙臺の意味によるもので、これは、遊覽地の巡歷には歷史的の背影を伴ひ、一般的なとほり名による

を便宜としたからである。(以下本章に用ひる仙臺は汎仙臺の意と解されたい。)

仙臺は、西方に奥羽脊稜山脈を控え、東北本線沿ひに廣闊なる沃野と多數の湖沼を點じ東方牡鹿半島沿ひの丘稜によつて、北海よりの寒流に伴ふ朔風を避け、仙臺灣内に黑潮の澎滿するを抱く、東北中での溫暖の地である。地勢は川の字を左書きした川形をなし、長線は脊稜山脈となつて、北に栗駒の秀缶をおき、南下して藏王山(不忘山)の高峻より福島の吾妻山へと延び下るのである。中線は大崎廣土となり宮城野となり、或は鹿島臺、松島海岸の丘稜こそ夫と見るべきものと思ふ。中線と右線の間を切るものは北上川で、右線はこゝに劃然と、氣仙沼海岸より牡鹿半島へ

と東南線をなすのである。此の凵字形間に多數の河川の縱横してゐるのも仙臺の特色の一つであらう。北上、阿武隈の二大川を初めとして、江合、鳴瀨、迫等は北部に流れ、古歌に名高い名取及び白石川は南部に注いでゐる。此の他、周圍七里十二丁の伊豆沼を初めとして、長沼、メ切沼等多數散在してゐるところにも仙臺の特色がある。かく水利のいゝところだけに反面に於て尠からず水害も蒙り、多額の縣債の殆ど全部が治水費にあてられてゐるといふことも特色の一つかも知れぬ。自然の皮肉でもあり、識者の一考を要すべき問題でもある。

六十二萬石の昔は實收百五十萬石と傳へられてゐるが、大部開墾された現在に於て、岩手縣南五郡を除いた宮城縣だけで、平年百五十萬石の收穫あり、内約六十萬石は縣外に本石米の名に於て移出され年々品質の向上をもつて好評を博してゐる。金華山沖の水産、殊にも燒竹輪と、宮城縣沃野の仙臺白菜との移出は、益々仙臺其ものゝ聲價を高からしめ、今や、仙臺産業を組織化し地方に獨自性を與へんとしつゝあるのである。同じい東北のうちでも、仙臺としての地方色を生産生活に表はさんとしつゝあることは喜しい現象である。

人情思想の方面に於ても、大藩三百年、波亂なき治世のあとを承けてゐるだけに、概して溫良淳朴であることは認め得らるゝことである。應揚といはるる反面には大まかで不規律の批難もあ

るが、これは善良な謙讓、或は獨りよがりの獨善性とも云ふべき慣性によるものと思ふ。經學と禪學の傳播、それに豊かな大藩生活は、ある鵜的なものをなさしめたのではないかとは一部人士の云ふところで、物事に徹底を缺くきらひのあるのは、獨りよしとする性癖と、從屬と支配に慣らされた一の事大主義の禍根から來る弱點ではないかと思はるゝ。併し一面に於ては、非常に忍耐强く、假令椽の下の力もちとして終らうとも義を貫くだけの强味もある。事大主義の傾向を持ちながら、他を蔑視するの惡癖は、自らを詐るものとも見え、保護色を彩らんとするもので弱點であるが、重厚にして默々と己が業を專心し、更に忍苦に屈せざる長所と對比する時、吾人はいづれにも軍配を擧げ得ざるものである。

又市部と仙南と仙北とに於て稍人情を異にしてゐるかに見える。市部は敍上の性癖洗練されたるものあり、仙南は溫良に見え、仙北は稍敏捷なる傾向がある。

襄に左書きの凵字形に地勢を見たが、溫泉、遊覽地古蹟の分布狀は自ら趣を異にしてゐる。

溫泉は主として西邊脊稜山脈を負ふて、至るところに湧出するが、仙南不忘山麓を中心にした、青根、遠刈田、鎌先、小原等と、舟形山の南麓に位する仙臺西方の秋保、定義等と、栗駒岳を中心とする鳴子、赤湯、川渡、鬼首、須川等の一劃である。これ等の溫泉はいづれも閑靜素朴の山丘

にあつて湧出量の豊富と多種多様の泉質を誇り、併せるに水光の純色をもつてし、更に加ふるに野趣愛すべき、敦厚なる人情味をもつてしてゐるのである。最近の温泉場の諸設備の整備と共に本邦温泉境の杉なるものとして誇るに足るであらう。

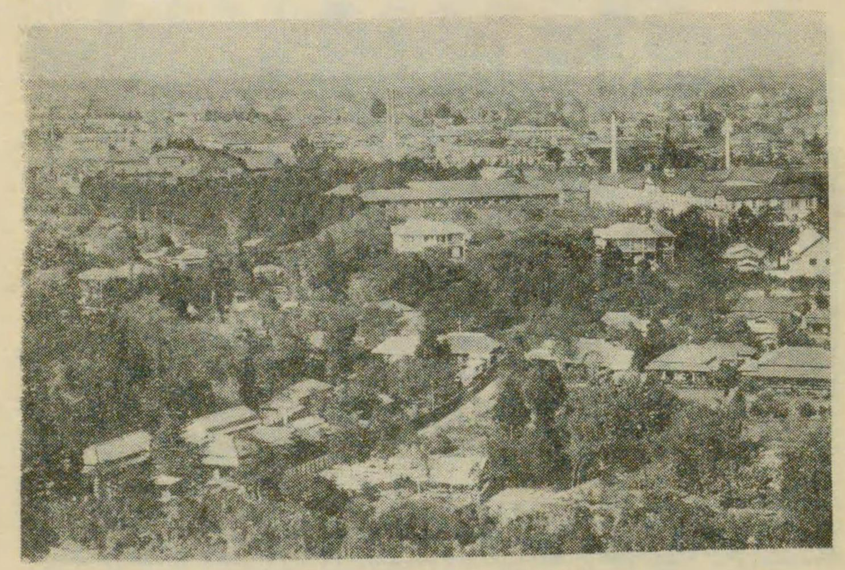
遊覽地に於ては、松島の絶勝を最として、金華の靈島あり、嚴美、貌鼻の絶景あり、夏季の登山には不忘の快峻あり、紅葉の雅境として白髪山あり、海邊には至るところ白砂青松の海水浴場がある。即ち、渡波、石巻、野蒜、桂島、菖蒲田、磯濱等を數へることが出來る。舊蹟に於ては藤原期の模型平泉あり、桃山時代を偲ぶ、瑞巌寺、大崎八幡は東北での誇りであり、千年の昔より存する高倉の高藏寺阿彌陀堂に詣でゝ、國寶嵯峨天皇の御親筆を拜し得ることは、仙臺の誇りであり、探勝者の行を更に意義多からしむるものである。

更に、祖公政宗を始め、支倉六右衞門、政岡、内藤以貫、林子平、或は蘆東山、大槻平泉、磐溪等の先哲賢人の跡を尋ね、其よつて來りしあとを探ねることは、益々興を多くし、彌く、旅の味を深めるものであらう。

仙臺市

仙臺の古蹟を探る前に少しく仙臺そのものの形成について記してみたい。

元來、仙臺の地は藩祖公政宗の岩手山城より移つた慶長の頃から初まるもので、東、仙臺灣に面して大沃野を控え、後方面に奥羽の脊稜山脈の嶮を負ふた自然の大城廓の中樞をなすところである。王朝時代東征の名に於て中央朝廷より遣された將軍使臣は、多くは現在の仙臺地方或は西海岸の出羽附近であつたといふことは、夷狄の蟠居によること勿論であらうが、交通上の便宜も相當な因をなして居つたことゝ思ふ。國府國分寺の設置に見ても、優に自然的な恩惠のあつたことが明かだ。その道の奥、陸奥が中世時代にあまりにも有力な文献を殘さないでし

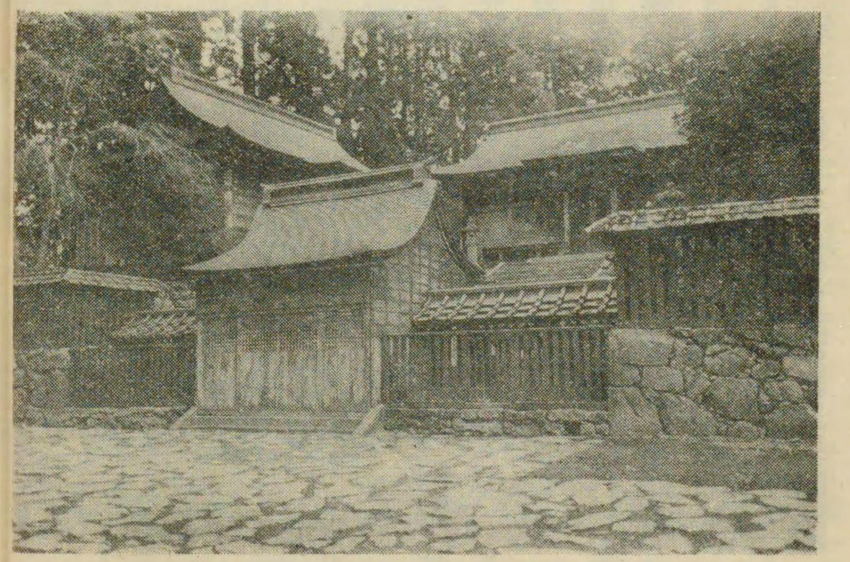


愛宕山より市街の一部を望む

まふたことはどうしたことか、今は往昔の歌枕に表はれた、宮城野、或は名取の川等の其かみのことを、幽に想像によつて描きみるに過ぎぬ

現在の仙臺の地は、千體佛のあつたところとして千體と稱へられて居つたのが、何時の頃からか千代と改められ、それが祖公政宗の城を築くに及んで、「仙臺始見五城樓」風物凄々宿雨收」の唐の韓羽の詩句からとつた「仙臺」と改められたのである。一に「五城」と稱するのも此詩句によるわけである。觀蹟聞老誌、名跡誌等に出る、

「岡上自ら望めば卽ち木下の古林春色に傲り宮城野の曠野秋爽に富むその木末は則ち本荒の鄕なり錦萩芳原に績織し其の極目則ち松浦島



經ヶ峯瑞鳳殿

也布帆遙瀛に浮動し千賀の綢繆多賀の縹渺皆吟眸に入る玉田横野北野に亘り和泉東奥西岳に峙つ實に郊外の絶境也」

は仙臺愛宕山或は榴岡あたりから眺めた情景であらうが、仙臺は此文の如く稍高燥の地である。西から南へと青葉山、越路山、愛宕山と廻り突端茂ヶ崎の高丘に終り、北から東へと連丘起伏し と小鶴の邊に終る。青葉山より末廣に擴る東南一體は廣闊なる宮城野となるのである。

市は、芭蕉の辻を中心に、東西、及び南北に通ずる縣道國道を根幹にして大町、國分寺各五丁目に分ち、これに沿ふ多數の街路をもつて形成されてゐる。仙臺驛は、此の辻より十丁東のところにある。最近、長町原町七鄕村等合して、十七萬の人口を擁する東北最大の市となつた。學校官衙、會社等多數集り、生産工業、商業等とは稍均衡を失した憾みはあるが、市街電車、郊外電車の發達と共に從前に比し作興氣分旺んになつて、近代都市形成の趨向に順應してゐる。杜の都として學都の建設を叫ぶの士もあるが、幾程の力を效し得るか見ものである。

仙臺を大觀せんとする人は、驛前廣場を右して大町通りに商賈の狀況を見つゝ、廣瀨河畔に出るか、驛前左廻の大學病院行電車にのつて大町頭公會堂前で下りて大橋を渡つて、藩祖遺業のあとを見るべく、大手門に昔を偲びつゝ、門内の山路を左へととつて、元の御本丸趾なる天主臺に

上るのが順當であらう。英傑獨眼龍大成の跡に立つて城下仙臺を見ること決して徒爾ではない

こゝ青葉ヶ崎の最高所に立つて兩翼の高丘の間を東南へと廣る狀は、圖南に志を伸ぶる一つの暗示であつたかも知れんなどゝ思はれもするのである。鄉國のために死んだ英靈の鎭まる招魂社に詣でゝ後は、ローマへの使臣支倉六右衞門の墓、或は幕末の卓見家林子平の墓、仙臺の一の柱石とも云ふべき政岡、本名三澤初子の墓を訪ね、國分寺に王朝時代の東北敎化の跡を尋ぬべきであらうが、玆には、大町を界に南北に分けて箇々について簡單に記述することゝする。

【櫻ヶ岡(西公園)】市電公會堂前で下車したところが公園で、此邊は、川內卽ち大手門前あたり一帶は、舊藩時代重臣の屋敷並んで居つたところで、此公園も古內左近介の屋敷跡である。京都御所の櫻と同種のものを近衞公から頂戴したといふ、左近櫻も園內にあり、藩祖が朝鮮から持ち歸つたといふ八房の梅もあり、廣瀨河畔の高所で、せゝらぎを聞きつゝ、對岸の翠巒を心ゆくまゝ味ふ格好の場所である。

櫻ヶ岡の枝垂櫻

【瑞鳳殿】公園より片平丁を通り、宮城控訴院、東北大學等を左に見て右に折れ坂を下つて靈屋橋を渡つた老杉の森が、伊達家三代までの廟所なる瑞鳳殿である。多大の經費をもつて營まれたもので、結構莊麗なものである。殉死した家臣の墓碑もある。般若經六百卷を埋めたといふので經ヶ峯とも云はれてゐるが、正宗山といふのを正とする。

【愛宕山】廣瀨川添へに十丁程南した高所で、藩祖の生地米澤から遷した愛宕神社と虛空藏堂がある。仙臺第一の眺望所で、眼下の廣瀨の淸流は勿論、杜の都の全景、鈍圓錐狀の七ツ森、泉ヶ岳から右方に太平洋の打寄する波頭まで見ることが出來る。こゝから山つゞきに大年寺があり伊達四代以下の廟所がある。

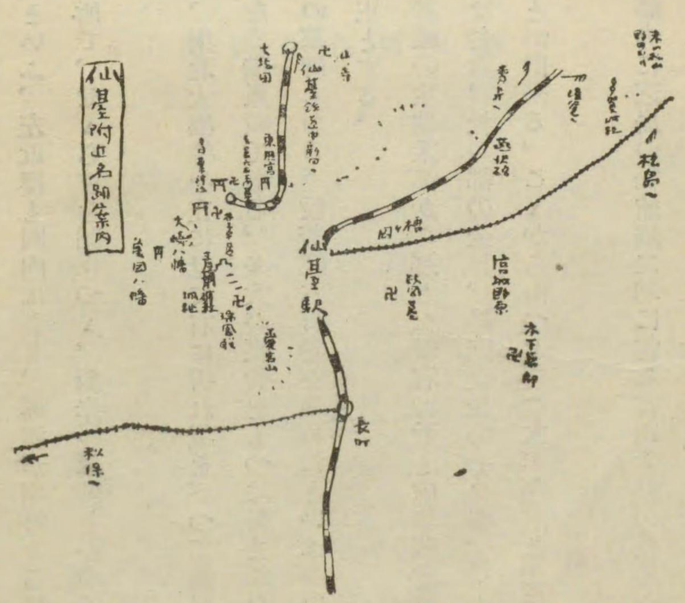
【孝勝寺】愛宕山から下つて愛宕橋を渡ると眞福寺に芝居の松前鐵之助に當る富田壹岐の墓所がある。こゝから荒町を拔けて東九番町に入ると政岡の墓のある孝勝寺である。木像、衣類、什物

等三百餘點あり、觀覽料は一人十錢である。

【宮城野】「宮城野の萩の名に立つ本荒の里はいつより荒始めけむ」（宗久法師道中記）觀應の昔の面影更になく、今は廣き練兵場と化してゐる。

【國分寺趾】原の南角に老杉の森がある、天平の昔國分寺のあつた跡で、今藥師堂が殘り閻浮檀金の祕佛を本尊とし、運慶作の藥師、協持菩薩、十二神將等安置され特別保護建造物となつてゐる。傍に白山神社の古祠がある。

【榴ケ岡（東公園）】藥師堂の西北に見える歩四の兵舍の立つ高臺が公園で、宮城電鐵榴ケ岡驛の北側になる。此處の大木の枝垂櫻は全國に冠たるものとして誇られてゐる。往昔は萬山榴に掩はれて、紅榴を布衣に摺つて榴擢りと名付けたとも云はれるが、城下の開けてからは、櫻の馬場となり、今日の櫻の名所となつたのである。



釋迦堂は、元祿八年四世網村が生母三澤初子の冥福を祈るため初子の持佛釋迦像を安置したものである。西に寄つたところに天神社があり、枝垂梅、筆塚、句碑などがある。

北　部

【東照宮】榴ケ岡は東十番丁にあたるから、東七番丁驛に出るなり、或は仙臺驛を右へ道をとる。宮城野橋を渡て。（驛前から乘合自動車もある）六番丁を北へ突き當つた高所が東照宮である。二世忠宗が幕府に乞ふて、承應三年江戸より移靈したもので、戊辰當時輪王寺宮の御滯在になつたところである。四月十七日の例祭日には神輿渡御と古式の武者行列がある。

【支倉六右衞門の墓】東照宮前より仙臺軌道に乘つて數分、終點通町驛に下車、其北方に見ゆる高丘に光明寺がある。慶長十八年の昔、九月十五日、長さ十八間の船を作り、祖公の大志を伸ぶべく、信書を持して六右衞門、ソテロ等幕臣商賈凡て百八十餘人をのせて、牡鹿郡月の浦を出帆したのであつた。非常なる歡待を受け首尾よく使命を果し、八年の星霜を經して元和六年八月歸つたのである。

【青葉神社】光明寺の西隣が卽ち青葉神社で、祖公政宗の祀らるゝ縣社である。五月二十四日と

十月九日は祭日として、神輿の渡御、甲冑行列がある。

【林子平の墓】のある龍雲院は、青葉神社の南西數丁のところにある。幕末擧世昏々たるの時、三國通覽、海國兵談等を著はして活眼洞識の警言を發したのであつたが、無根の事實を流布するものとして幕譴を蒙り、版行物、版木等沒收され、兄嘉善の元に蟄居せしめられたのであつた。

「親もなし妻なし子なし版木なし金もなければ死にたくもなし」の歌は此の時になつたもので、以來自ら六無齋と號したのであつた。籠居一年寛政五年六月二十一日五十六歳をもつて、此の不遇な先見家は逝いたのである。天保十二年幕府の赦命なつて初めて墓を設け、明治十三年内務卿伊藤博文其墓に奠し感激描く能はず遂に讃仰の碑を樹つるに至つた。

【大崎八幡神社】龍雲院より十餘丁西、八幡町に、慶長十二年になる桃山式の大崎八幡がある、岩手山より移靈したもので、八棟造りの莊麗比なきもので、東北での代表的な桃山時代の遺物である。祭日は九月十五日神樂、流鏑馬等ある。一月十四日には松焚祭があつて市中の人集る。

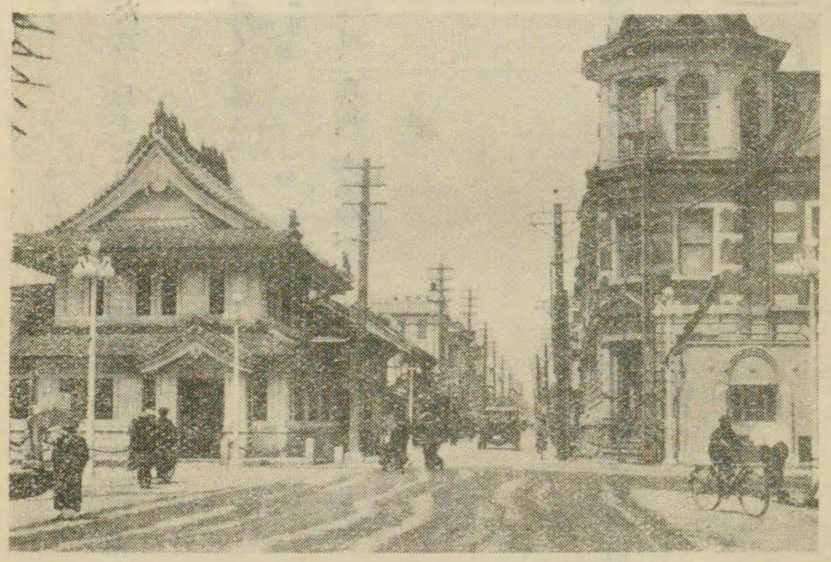
【養賢堂】市電縣廳前で下車、縣廳の門内左に上れば養賢堂である。五世吉村、藩祖の遺志を奉じて、人材養成機關として建てたもので、田邊樂齋、大槻平泉、磐溪新井雨窓等の碩學が專ら學を講じたのであつた。最近、藩時代の遺物陳列館にあてらるゝの計畫もたつてゐる。

芭蕉の辻、市電芭蕉の辻線にのれば驛前より數分で行く。袖屏があり、矢狹間、鐵砲狹間のついた物見櫓風の白壁二階建の家が、西北角に立つてゐる。昔は四辻にあつたのだが、數回の火災で失はれたのである。元は「忠孝の札、切支丹禁制の札、捨馬禁制の札」等建てられたところである。芭蕉といふ虚無僧を間諜に使つた其功を愛でゝ政宗が屋敷を此處に賜つたといふ說もある。

郊外の舊蹟

【多賀城趾】鹽釜街道筋にあり、往昔鎭守府のおかれたところである。四世綱村の時、市川橋の橋材中から見出された、壺の碑がある。此の附近から初代の市川團十郎が出たと云ふ種々の

芭蕉の辻



考證物も傳へられてゐる。

【蒙古碑】多賀城趾近くにある、弘安の役で戰死した元の兵士を弔ふべく、鎌倉圓覺寺の祖元和尚が窃に此處に建てたものだと云はれてゐる。

【末の松山】宮電多賀城驛附近にあり、沖の石又此近くにある。

【旅館と經費】仙臺ホテル、針久本支店、境屋寺二圓より

【土産ものと物産】仙臺平、埋木細工、漆器、堤燒、鯛味噌、蒲餘、丸重ゆべし

松島

【位置と交通】東北本線松島驛より三十分の松島電鐵によるのと、仙臺から宮城電鐵によつて直行するのとある。他に、鹽釜より汽船和船で行く法もある。

松島驛より松島海岸迄	東南的一里	自働車	三十錢
		電車	二十五錢
		人力車	三十錢

右は汽車の發着に合ふ樣になつてる。

仙臺より松島公園驛前迄	宮城電鐵	六十錢

四月より九月迄 三十分毎
十月より三月迄 一時間毎 發車 約四十五分

仙臺驛より鹽釜驛迄	宮城電鐵	三十錢

三十分、三十分毎に發車

鹽釜より松島海岸迄	遊覽汽船	一等	(片道)四十九錢 (往復)八十二錢
		二等	片道 三十一錢 往復 五十四錢

約五十分、二十五名以上の團體は割引さる。

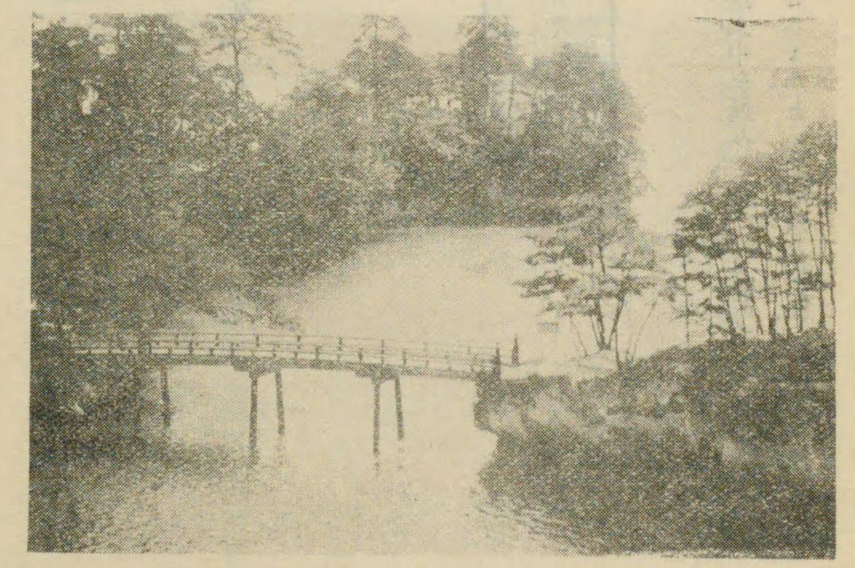
松島驛よりの道をとれば、高城川に沿ふて潮の香遙ふ中を進み、急に眼前彼方に瑠璃面の如く輝く松島灣一部の風光展げらるゝのは、如何に展開さるゝかといふ豫想と相俟つて旅人の心を愉

快にする。道は新富山の下を通つて海岸に　る。

宮城電鐵によるときは、仙臺驛より四十五分にして着く。榴ヶ岡驛の左側は歩兵第四聯隊兵營、右側に擴がる大きな原は、其昔萩の名所として謳はれた宮城野原、其の一きは高い老杉の森は木の下藥師堂のあるところ、天平の昔國分寺の趾である。多賀城附近には、蒙古碑とか野田の玉川とか名所舊蹟が多い。鹽釜の船着き場の傍を通つて、隧道に入る。松島の點々たるを車窓に眺め、山間の茅屋を見、田圃等を見つゝ五つ六つ隧道を抜けて松島公園驛につく。

東海第一の好風、松島の眞の絶勝たる所以を味はんとする人は、是非一泊するか、又は日中の全部の時間を費さなくては、天惠松島の妙境

雄島渡月橋



を知ることは出來ない。

時間の都合にもよることであらうが、多くの遊覽者は、海岸附近の探勝のみに止る樣な日程を作るらしく見えるのは非常に遺憾なことである。扶桑第一の折紙付きの松島觀光の味を、都合とはいへ薄めてしまふのは兩者のため殘念に思ふものである。又松島としても、もつと、紹介の徹底も計らねばならぬだらうし、絶勝を探る輕便な設備も整へ、低廉な乘物の完備も計らねばなるまい。

三百の青螺、人を迎へるに決して冷淡ではない。或は欹ち、伏し、相抱き、相連り、歡呼して迎へるのである。此の諸島の奏づる交響樂を、大鷹森、或は雁金森、富山、多聞山、扇谷等にあつて靜に聞き入ることは、天上の快とも云ふべきものである。

筆者は個々の解説を避け大觀のみを記し、從來の稱呼を列記し、一例として海岸より近距離の雁金森記行をあげて松島紹介の筆を結びたい。先づ海岸より、

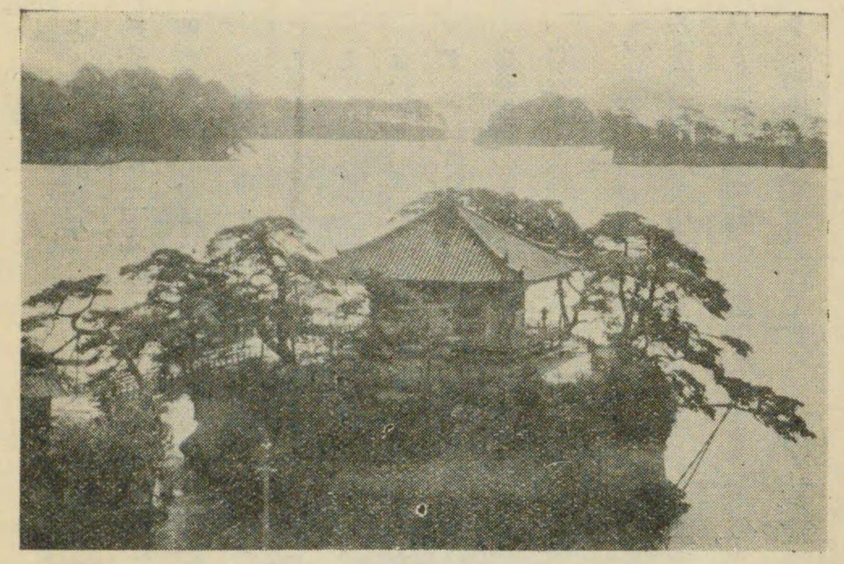
○瑞巖寺及び海岸近傍

汽船發着所の正面に、古びた山門が見える。門内に入れば老杉こもつて坦道しめやかに嵐氣と

共に禪刹の風韻を感ずる。右手一帶の山崖には無數の無名窟がある。淳和天皇天長五年、慈覺禪師、京都比叡山山王社を遷して松島寺を創め、當時、徒衆三千と稱せられた其頃よりの窟鑿に成るものとも云はれてゐる。左側鐘樓下の岩窟は有名な「法身窟」で無相窟とも云はれ、北條時頼東巡の折、松島寺に宿を求めて追はれ、此窟中に老僧と合ひ、旬余淹留悟道の本懷を遂げて飄然として去つたといはれてゐる、此の老僧こそ法身禪師であつたのである。後、時頼伽藍を造立し法身を請ふて開山始祖となし寺號を青龍山圓福寺と曰ひ鎌倉建長寺に隷せしめたのである。此の法身窟十數歩のところに、中門左側に御成門があり、本堂の豪快なる線條を見る。右側小玄關に拜觀者入口とあり一人十五錢で詳しく説明して貰ひる。

藩祖公政宗、桃山聚樂或は京畿幾多の佛閣殿堂の造營に練磨熟達した名匠良工百三十名を鳩めて工を成しただけに、桃山風の豪宕莊重の氣韻内外に表はれ三百年の昔織豊時代を十分偲ぶことが出來るのである。狩野永德、三樂等當時一流の畫人を初め、多數の名工はこゝ松島に在つて偉大な完成をなしたのである。全體の構想は勿論、本堂、玄關、御成門等豪にして素、而して快なる風韻を漂はしてゐるのである。

瑞巖寺を出て右へ曲ると紅蓮尼の遺跡と傳へる碑、軒端の梅等がある。こゝを左に廻つて海岸



五大堂

に向ふと右側崖上に觀瀾亭がある。所謂「渚宮」で觀月崎である。伏見桃山にあつた豊太閤の別墅で公政宗に賜つたものを、二世忠宗の時海路こゝに移して月見の御殿としたものである。山樂の筆になる襖繪あり、桃山時代のそれを偲ぶことが出來る、拜觀料は思召といふことになつてる。北數十歩のところに五大堂を見る。大同二年坂上田村麿が東征の折建立して多聞天を祀つたので毘沙門堂とも稱されたが、後年慈覺大師五大明王を奉安するに及んで五大堂と改められた。こゝにある鰐口は乾元元年の銘あるので有名である。

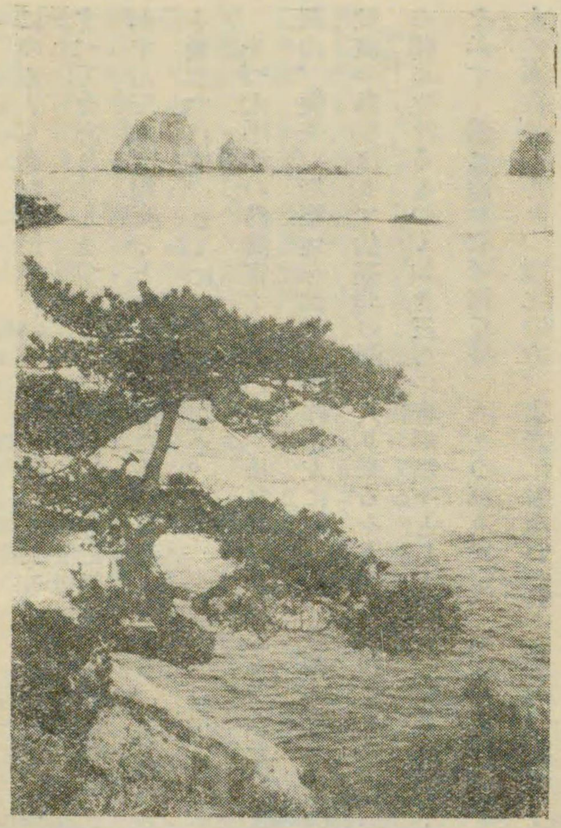
五大堂は新富山、或は瑞巖寺への途中寄つた方がいゝかも知れない。道を雄島の方へとると

とゝする。觀瀾亭よりパークホテルの前を通つて水族館の門前に出る。又は松島公園驛を下りて珍奇愛すべき三交の松の傍を通り、右すれば圓福寺の惠曉上人が聞いたと云ふ長老坂があつて、眺望の雅と共に西行がこゝから戻つてしまつたといふ傳說で有名である。「西行戻りの松」に出る。

【傳說】 或る夏の日、西行はあづま路を下つて松島へと道を進んだ。風光をあこがれつゝ疲れた足を運んでゐるとき會つたのが、牛に乘つた一人の少年である。西行は「どこへ行く?」と問ふと、少年は「冬もえて夏枯れ草を刈りに行く」と答へただけで、他に何とも言はなかつた。西行には何のことか少しも分らないので「冬もえて夏枯れ草を刈りに行く…」と心のうちで繰り返してみたがどうしても分らない。句をつぐことが出來ない、なんだらう? と迷つては、自分の修養の足りないことを深く魁ぢてしまつて、更に修養をつんで出直さうと、遂に都へと引返してしまつた、それがこゝの松の下だつたので、「西行戻りの松」と謂はれる樣になつたのである。

左への坂下は水族館の正門前で、觀瀾亭からの道と合して小松崎への徑となる。海に出たところ朱欄の瀟洒な橋がかゝつてゐる。渡月橋である。渡れば卽ち雄島で、小島と書き、見佛集に御島と記され、俳書の千松島は又こゝを指していつてゐるのである。島の周圍には多數の洞窟があり、佛像梵文等刻されてある。見佛上人苦行の古趾であり、雲居禪師上人を追慕して堂を建て、

今國師座禪堂と云はれるのが夫である。松島寺中興の祖洞水禪師又、松吟庵を建てたのもこゝであるが、藥師堂と共に近年の災火に燒失してしまつた。



【雁金森へ登る】

雄島への歸途を水族館側の賣店まで戻ると、岩石を高鑿り拔いた隧道がある。こゝを出ると山添へに一間餘の道路があつて石垣の下に附近は潮が寄せてゐる。五六丁進むと雁金森の山下道に出る。

海岸或は驛前からこゝまで人力車を利用して來るもいゝ。山道も前後に車夫をつければ人力車に乘つたまゝ頂上まで上れる。觀光客の多い節には海岸より雁金森下まで直行和船が出る。

この道は扇谷への道ともなつてゐる。だら〳〵坂を一丁程進むと左に入る土橋がある。こゝから頂上まで三丁半。松の疎林は夏は蔭をつくり、冬は風を避くるにいゝ。疎林の中、つま先上りにゆる〳〵進むのだが、いつか額に汗して來る。上ることが、いつの間にか唯一の本願となつてすべてを忘れてしまつてゐる。やがて平地に出る。眼前には島々が浮び、洋々たる大海原の心持かすんで水天相交るところ、渾然たる浩氣漾ふをみる。「これなるかな」と心は叫ぶ。更に進むこと數歩すれば、こゝに眼界全く開く。

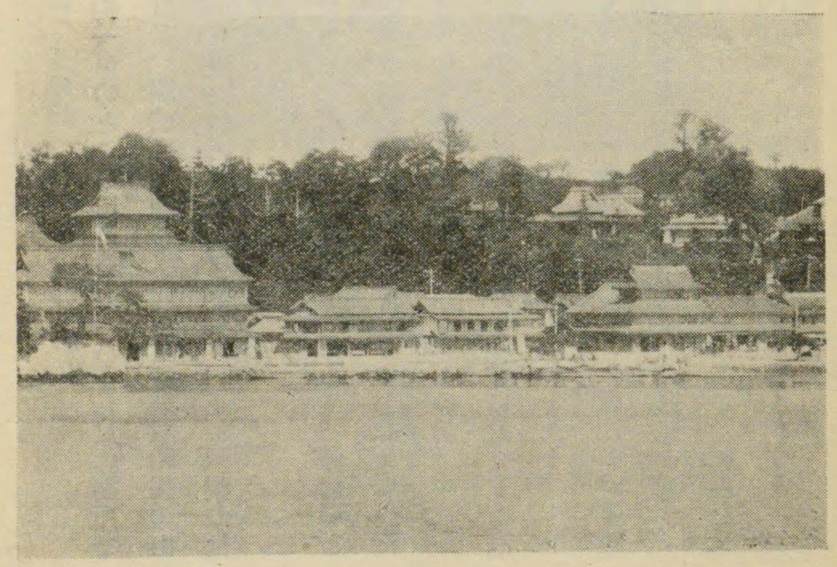
先づ太平洋の浩濤寄するところ、松島灣外廓の島々にあたつて波頭白く碎け、花淵の崎より多聞山、鹽釜の埋築地を眺め、眼眸を左に廻せば、金華の靈峰水天彷沸たるところに秀姿を表はし牡鹿半島横はりて仙臺灣の深く入り來るを支ゆるが如きを見、仙臺灣一櫛の水煙の下、眼前指呼の間に生けるものゝ如き三百の青螺點々として在り、奇姿妙態をもつて迎ふが如く故舊の親しみを示す。灣に迫り來る諸丘稜、所々の部落民家、或は、松島海岸の船の發着所のあたり、觀光の人の來往するあり、西北の方、雲表に雪をいただく栗駒の峻嶺を夢と見る相、すべてが之自然の妙工のなしたるもの、大山水圖として風格氣韻香氣を表はすものである。一ケの小さかな茶亭に憩ふて海氣嵐氣の間に温き人情味を味ふも文人墨客のもののみではあるまい。

此の絶勝の下二丁程下の海邊に船が着くのだから觀光者と松島そのものゝため輕便な渡船の設備一日も早くせられんことを希望する。

松島四大觀

【の一としての扇谷】は、雁金森に上る土橋を渡らずに眞直山道を六七丁進んだ高丘で、鹽釜より海上四浬、松島海岸より一浬のところで遊覽航路の一となつて居つて普通寄港することになつてゐる。こゝは峽勢左右に擴がり、松島の諸島嶼海洋を、開いた扇面内に見る。古來幽觀をもつて稱えられた勝地である。附近には伊達家の隱れ家といはれた、海無量寺跡山間幽邃のところにある、伊達家四世綱村の茶亭の址あり、

松島海岸



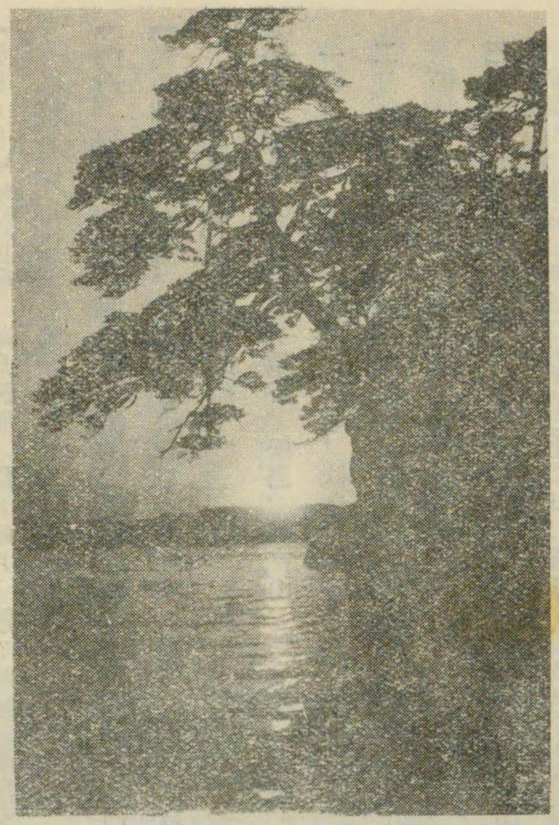
相當觀光者の多いことを證してゐる。

【富山】は松島驛より東北十八丁、海岸より北へ約一里のところにある三百八十五尺の高所である。頂上の大仰寺の庭前に立てば、松島灣の一大盆景、眼前に展開して、遠くは磐城相馬の山々を望み、漂渺たる海氣左方より迫り來つて、右方の丘陵山嶽と相對する明光は、正に觀の稱に背かぬ。

【多聞山】鹽釜の東北に見ゆる丘の突端がそれで、海上二浬、遊覽航路の一である。停船場より五丁、山上に毘沙門堂たち、鐘樓、大龍神の碑がある。松の樹間に島々を見ることも又異つた味がある。北側は千仞の斷崖、波濤の咽ぶを見る。こゝは美觀をもつて稱えられてゐる。

【大鷹森】松島灣内の最大の宮戸島、周圍六里半、戸數二百餘戸を擁する漁農村に屹立する高丘で三百五十尺あり。鹽釜より海上七浬、松島海岸より四浬餘、いづれも和船、モーターボートの便あり、遊覽航路中の尤なるものと云ふべきである。島内に多數の古墳あり、大鷹森の眺望雄大と相俟つに嵯峨溪の奇勝あり、宮戸八景、或は、瑠璃ヶ峯、落月の洞等多數の諸勝雅を競ふてゐる。殊にも早春より初冬にかけての宮戸島は正しく淨土の別天地を現ずるのである。試みに大鷹森に上れば目を遮る何ものもなく、大海原は脚下に迫り、金華山牡鹿半島夢の如くかすみ、奥

羽脊稜山脈羽前羽後の山々、松島海岸をおふ丘稜、灣内の全島嶼、磐城相馬の山等、雄大にして華麗、幽遠にして纎細なる大自然の創作は一眸のうちに收めらるゝのである。



狐崎の夕照

島内には里濱に旅宿一軒あり、砂清き海水浴場あり豊富なる魚介類海草類があるから、保健避暑の地としても可なりである。惜しいことには未だ設備の整はないのと乘物の少しく不便を嘆ぜざるを得ない。

【松島七浦】竹の浦　梅が浦、霞ヶ浦、胡桃が浦

簫が浦、片の浦、光徳が浦、

【松島八崎】月見崎、象鼻崎、小松崎、亀ヶ崎、洲崎、法師崎、蛇が崎、津が崎

【松島八景】梅浦早春、鹽釜暮煙、霞浦歸雁、江縣殘花、雄島夕照、瑞巖晚鐘、松島秋月、竹浦夜雨

【鹽松八景】鹽浦歸帆、雄島旅雁、觀月崎月、簫寺晚鐘、籬島夕照、浮島翠松、海濱漁火、富山暮雪

【灣內の釣魚】沙魚、鰈、鯱、黑鯛、鰻等和船を傭ひ、船頭に賴めば一切用意してくれる。

【島の茸狩】內裏島、都島等に松茸を生じ旅館の案內を得れば自由に採取する事が出來る。

【宮城縣選定の遊覽巡路】

半日の場合　(一)鹽釜、扇谷、松島、新富山、松島驛。巡路を逆にとつてもいゝ、以下同じ。

一日の場合　(一)鹽釜、馬放島、桂島、扇谷、松島、新富山、松島驛。

二日の場合　(一)第一日、鹽釜、多聞山、馬放島、桂島、扇谷、松島、新富山(松島泊)第二日松島、富山、東名、丸山、大鷹森、鹽釜。

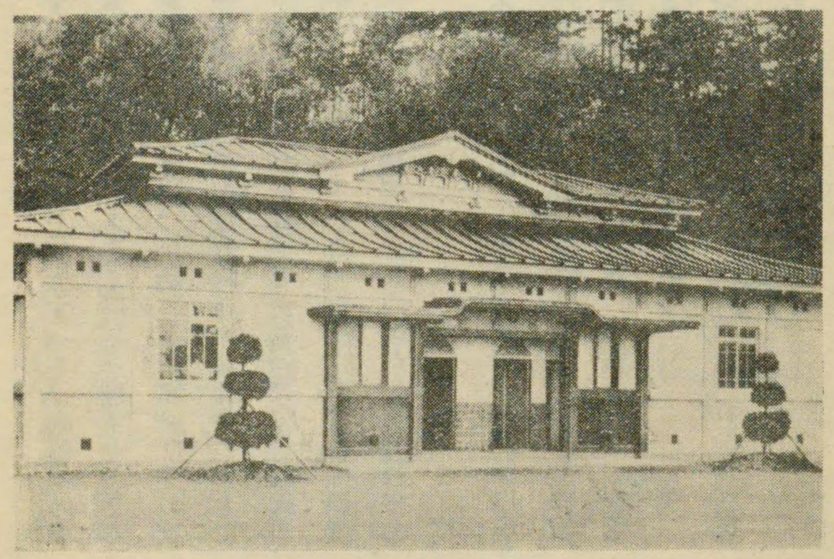
三日の場合　(一)第一日　鹽釜、貞山堀沿岸、松ヶ濱、菖蒲田、高山、花淵、君ヶ岡、澤尻、多聞山、東宮、鹽釜(鹽釜泊)第二日、鹽釜、馬放島、桂島、野々島、寒風澤、大鷹森、東名丸山、松島、(松島泊)第三日、松島、富山、新富山、松島、扇谷、崎山、獅子崎、鹽釜。

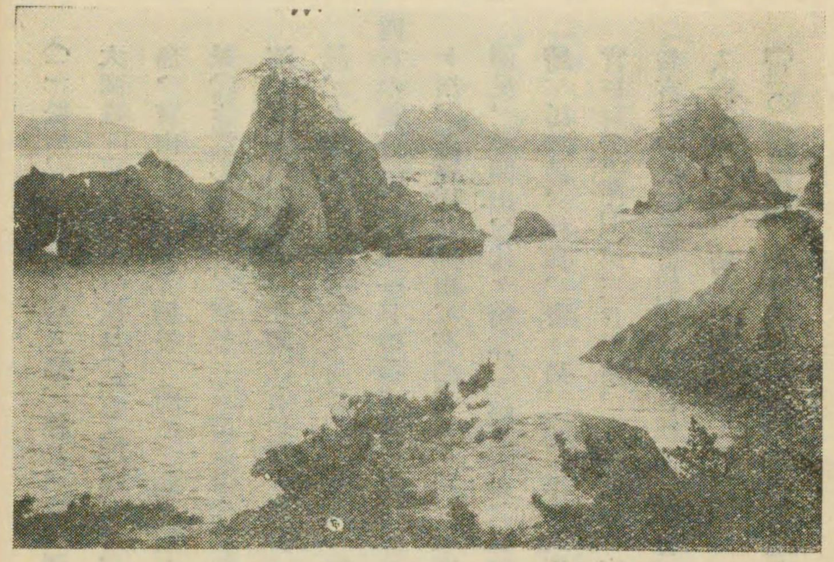
(二)松島、馬放島、野々島、桂島、寒風澤、大鷹森、東名丸山、松島(松島泊)第二日、松島、富山、新富山、扇谷、崎山、獅子崎、鹽釜(鹽釜泊)第三日、鹽釜、貞山堀沿岸、松ヶ濱、菖蒲田、高山、花淵、君ヶ岡、東宮、澤尻、多聞山、鹽釜。

四日の場合　(一)第一日鹽釜、貞山堀治岸、松ヶ濱、菖蒲田、高山、花淵、君ヶ岡、東宮、澤尻、多聞山、代ヶ崎(代ヶ崎泊)第二日代ヶ崎、馬放島、桂島、野々島、寒風澤、大鷹森、宮戸村(里濱泊)第三日里濱、東名丸山、富山、新富山、松島(松島泊)第四日松島、扇谷、松入裏、松入表、崎山、獅子崎、鹽釜。

【鬼の諸設備】小松崎約二萬坪の縣有地をか

水族館





不老山

りて、海産の宮城縣を紹介すべく、高橋氏の手をもつて水族館が營まれて居る。日下のところ水族館、兒童遊戯場、動物各種、船遊び等の設備が出來てゐるのみだが、遠大な計畫のもとに着々と工事が進められつゝある。(入場料大人二十錢、小人十錢)その外の宮城電鐵經營の遊園地には劇場、遊戯場等の諸設備が整へられてある。

【不老山の勝景】 大鷹森の眼下、野蒜海岸一帶は白砂青松、松島の景致と趣きを異にした、幽にして美なる海村である。東名濱の邊、不老山こそ不老長生の雅境である。

灣内遊覽船、こゝには半日或は一日の貸切賃金のみをのすることとする。

【土産物と物産】 巖燒(茶器)、寒竹ステツキ、印材、軒端の梅、紅蓮煎餅、藻鹽糖、燒鮒、牡蠣

【旋館と經費】 松島ホテル、白鷗樓、觀月樓、東洋館、一泊三圓内外、晝食一圓内外、新鮮な魚介の料理はいづれも自慢もの。

相船	半日貸切	五人迄三圓五十錢以上一人を增す毎に九十錢增
モーターボート	一日貸切	五人迄五圓以上一人を增す毎に一圓增
	十人乘り	二十圓

鹽釜 宮野郡

鹽釜は、戸數三千、人口一萬六千、三方に丘陵を負ひ、前に千賀の浦を控えた要津。鹽釜神社西八丁、菖蒲田海水浴場東一里半、桂島海水浴場、海上東一浬、松島四大觀の一多聞山海上東一浬。

【鹽釜神社】 東北の大祠であつて中古より廣く世に聞え、鹽釜明神ともいはれ、又鹽釜六所明神或は三社の神といはれ其祭神については種々の說があるが、前宮司山下三次氏の考證によると、陸

奥國一宮正一位鹽釜大明神三座として、左宮は武甕槌神、右宮經津主神、別宮岐神としてある。武神として、船路の神として又お産の神として參詣者の絶ゆる間がない。

家内安全御符　五錢、十錢、十五錢、二十錢

掛　守　三錢

裏坂（一名女坂）は勾配緩かだ。表坂の急峻二百五十四段は、寒いとき一汗流すにいゝ。社前には多羅葉の珍木、林子平考案の日時計、秀衡の三男、和泉三郎寄近の文治燈籠や、仙臺藩主周宗寄進　鋼鐵製燈籠がある。

鹽釜神社表坂

唐門東詰に、

安産掛守　五錢

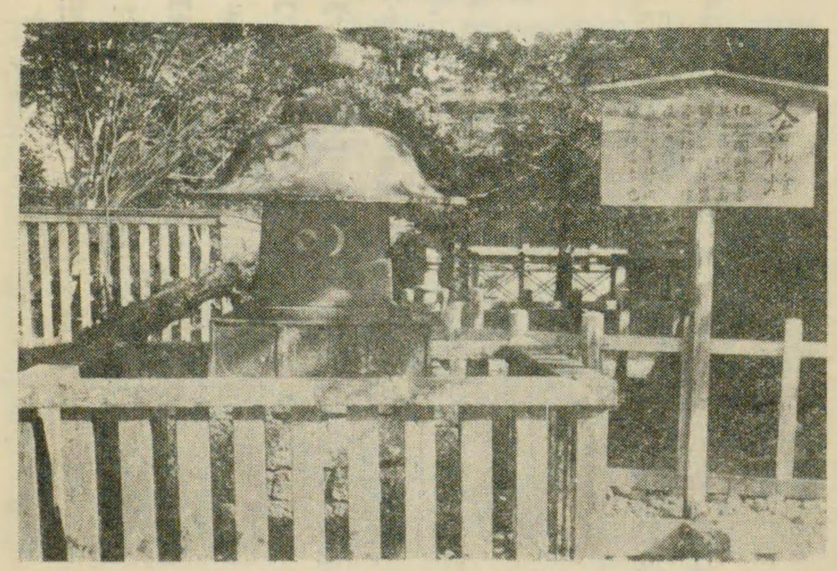
安産掛守一組　（御符、掛守御復帶）三十錢

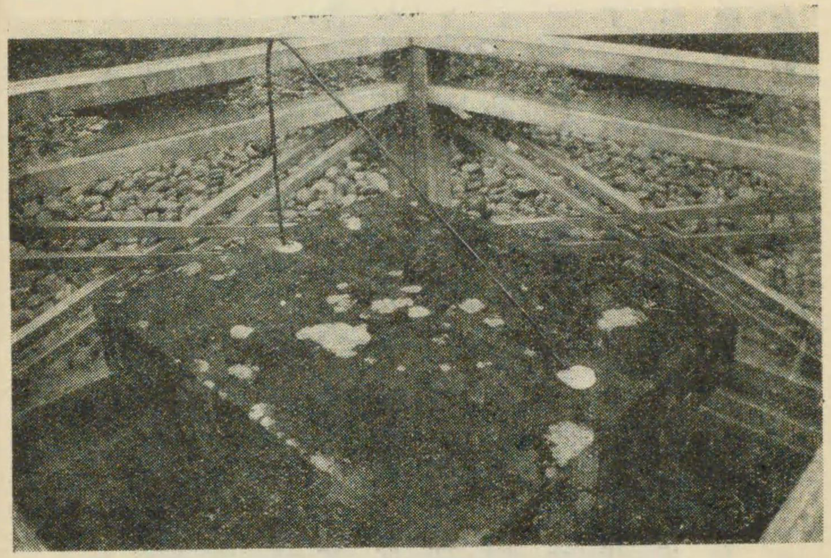
御　掛　圖（軸）一圓五十錢　あり、祭禮は

四月二十五日花祭、十月の十六日の帆手祭

表坂から南三丁、町の中央に御釜神社がある。古い鐵釜四個を安置し、大は徑四尺八寸二分、小は四尺、深さ五寸七分、昔鹽土翁神が、此釜を用ゐて製鹽法を教へたといふ。八鹽煮神社近くにあつて、製鹽に功勞のあつた翁媼十四神同祀してゐる。牛石神社、御釜神社から、東へ半丁、民家の裏、小祠の前に池あつて中央に牛石があり、潮の滿干によつて脊が見えかくれする鹽土翁神製鹽の際使用の牛、後病死して化石したのだと傳ふ。

文治神燈





林子平作の日時計

附近に野田の玉川、末の松山、壺の石碑等一里か一里半以内のところに名所がある。

【旅館と經費】 鹽釜ホテル、惠比屋等 一泊 二圓より三圓五十錢、晝食一圓より一圓五十錢

【物產】 鮮魚、石材、岩土、木材

【みやげもの】 梅の花見、引昆布、藻鹽糖、五色あられ、沙魚、牡蠣、むし沙魚、南京糖、牡蠣エキス、不老園子。

金華山 牡鹿郡

【位置と交通】 連山起伏し、太平洋の波濤を突切つて東南の方を指すところ牡鹿半島と稱ばれ、仙臺灣を扼劃する大防波堤であり、寒暖流の相る交は、北寒南暖を分岐する一基點とも見らるべきところである。この突端を距てて奇嚴怪石に積みあげられた周圍六里の島こそ金華山で海拔千四百六十尺の靈山毅然として太平洋萬里の波濤を觀望してゐるのである。

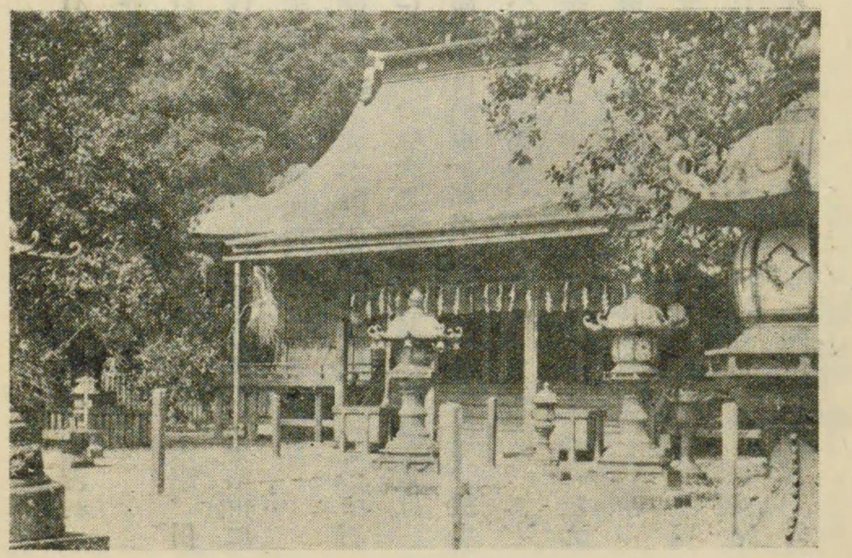
こゝ金華山への道は二つある。

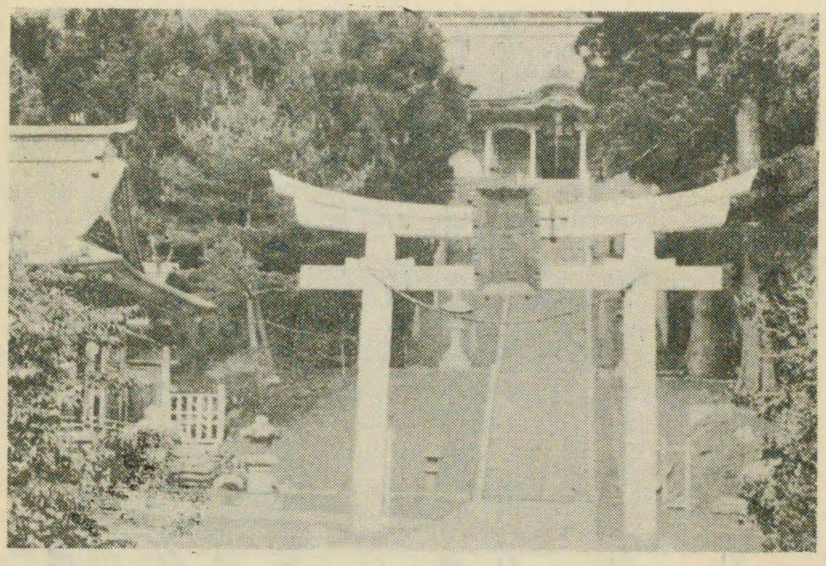
【陸路】 石卷町より渡波町を經て、荻の濱、大原、鮎川等に寄り半島を東南下して山鳥の渡より船で金華山へ渡る(全行程約十里)のと

【海路】 鹽田より鮎川濱に寄港して金華山に至るのと、(二十八浬五分約四時間)

鹽釜より石卷に寄港して金華山に至るのと(三十五浬三時間半)

鹽釜神社拜殿





黄金山神社拜殿

石卷より金華山へ直行するのと（十七浬約一時間半）

石卷より「半島巡り」と稱して渡波、大原、田代、鮎川へと半島の濱々を訪れつゝ金華山に至る（十七浬半約四時間）とある。

【陸路】 東北本線小牛田の分岐線によつて石卷に出るか、鹽釜より船路石卷へ出るか或は、松島より自動車を利用して、石卷へ出て、渡波町へ自動車、馬鐵、人力車に乗つて出る。あとは鮎川迄八里半の道を、出入激しい港灣の風光を眺めつゝ、慶長の昔、支倉六右衞門 圖南の志を抱いてローマへの船出をした月浦に想を寄せたり、山村なる半島の人情風俗を浦々の部落に看取しつゝ、荻濱、大原、鮎川へと出る。近

時道路改修成つたから案外樂に行歩を樂しむことが出來る。鮎川より、山路十丁、峠の黄金山神社一ノ鳥居に先づ額いて、八丁下つて山鳥の渡へ出る。一草舍待仙庵に金華の全容を眺めつゝ渡船に乗る。

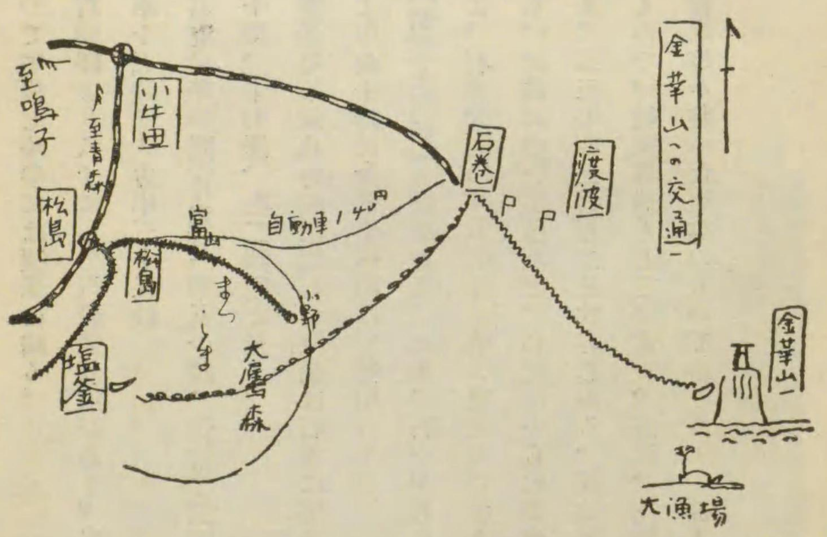
【海路】 鹽釜驛前すぐ見ゆる汽船發着所に行つて乗船券を求める。

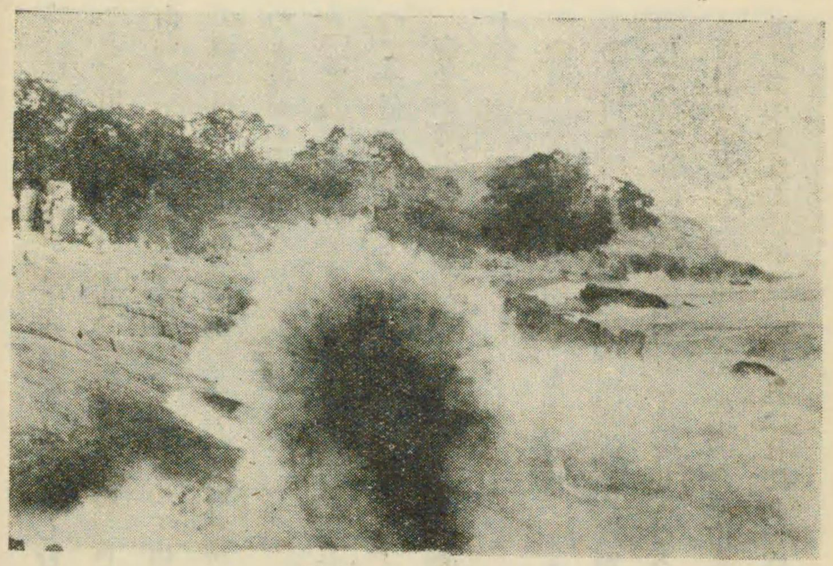
鹽釜金華山間（片道）一圓八十錢（往復）三圓四十錢

（鮎川或は石卷に寄港するも同一運賃である）

○鐵道連絡の乗車船券は、汽船賃を相當割引して指定驛に於て乗車船券を發賣してゐる。

汽船は主として鐵道連絡船の第一金華山丸が利用されてゐる。午前八時出帆、日歸りの客を





千疊敷の激浪

待つて午後七時半には鹽釜に歸る。

石卷驛より八丁にして汽船發着所がある。自動車十五錢、人力車三十五錢。

石卷金華山間(片道)一圓五十錢、(往復)二圓八十錢、十七浬、約二時間で行く。

鹽釜を午前八時に出帆した汽船は石卷に寄港して午前十時に金華山へ向けて發つ。

【船路と汽船】 鹽釜からにせよ、石卷からにせよ、石卷灣内の多數の諸島嶼の間を進むのだから、波濤については殆ど、心配はいらぬ。汽船も、二三等客三百有餘を收容し得る、百餘噸のもので、純乘客船として、食堂、浴室、化粧室賣店等を整へた堅牢のものである。

金華山參詣

海陸路共に、山鳥の渡を經て、二十四丁の海上は、元氣な舟子によつて、

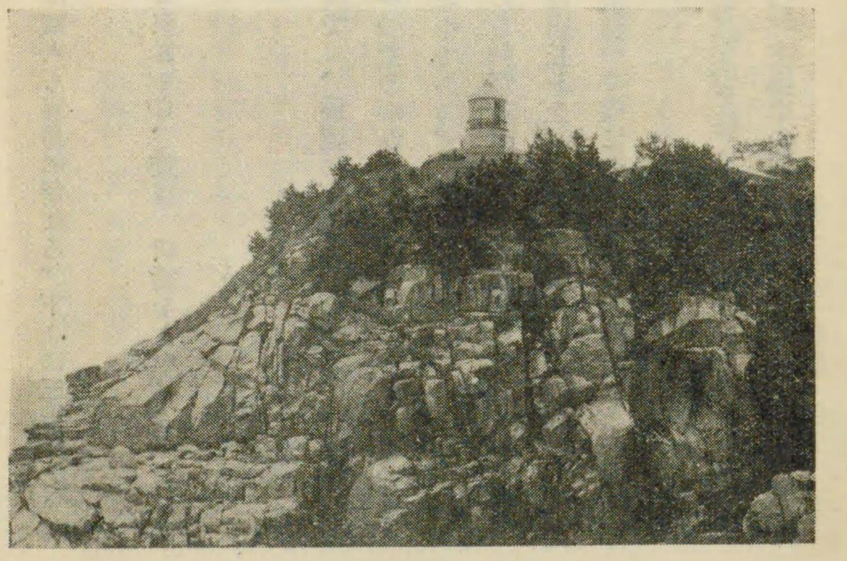
金華山船場に運ばれる。船賃一人十錢、團體は八錢位になる。鐵道連絡船は、正午十二時に着き、午後三時半出帆するのだから、日歸りの參詣者のため左の四種を選ぶ。

第一、黄金山神社に參詣して直に歸る(約一時間)

第二、參詣して祈禱を乞ふ(約二時間)

第三、參拜して、「表廻り」と稱する名所を探り、金華山の最高峰千五百六十餘尺の頂上に上り大海祇神社に詣で、無双峰に出でゝ、太平洋の大海原に雄大壯觀 相を見、別路をと

金華山燈臺



つて歸る。社務所より頂まで十八丁五十分あれば婦人も容易に登れる。下りは三十分と見れば充分。（約二時間半）

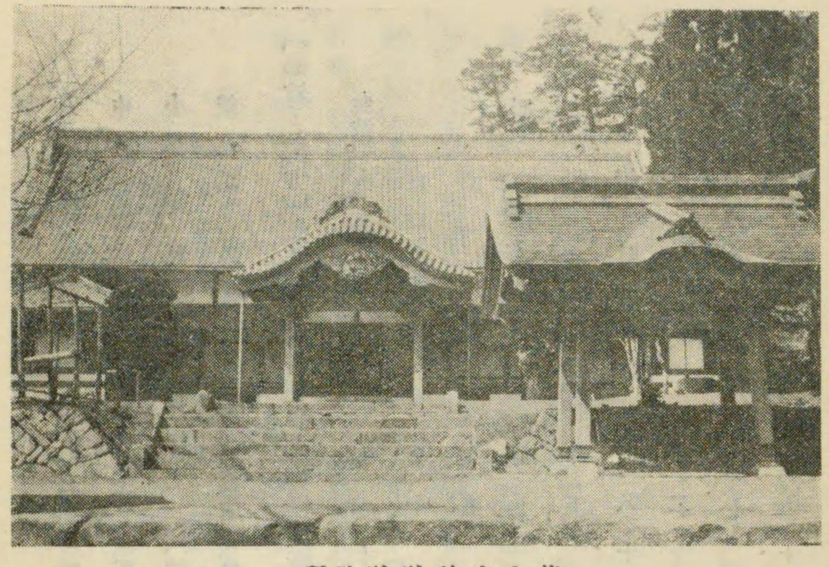
第四、これは第三の方法に祈禱と晝食（表廻りして來るから、晝食　祈禱をと申込んでおけばよい）の時間を入れたものである（約三時間半）

一泊しての參詣者

三時間半の日歸りもさることながら、孤島靈山に詣でゝ、神境に人生の旅を憩ふて、早朝古式な祈禱に心身を淨祓することも吾人のなすべき業の一つであらうと思ふ。況して、些も汚のない清淨境に自然の壯大を觀悟する大洋中の孤島に於ておやである。先づ

【第一日】　參拜して、後、二十里海上の指針たり父とも仰がるべき燈臺に見學に出る、社務所より約二里飽荒崎の崖上百七十八尺の高所にある、道は山丘を上下しつゝ進むが些の難所もない。程よい行途に心身はいつか純無垢化されて、社務所に歸つて寢につくことは、祇境金華山に於てのみ味ひ得る妙悟境といふべきである。

【第二日】　早朝身を淨めて神の御前に額き、莊嚴なる祈禱を終へて、「表廻り」の探勝に出かける頂上の大海祇神社に詣で、更に「裏廻り」の諸勝を探つて東海岸の波濤、斷岩を嚙むの壯觀をみて



黃金山神社社務所

社務所に歸る、四里五時間を費せば充分である。

【案内料】　金華山では觀覽料といふて、神符授與所に案内を賴むとき求めればいゝ。一人金十錢團體割引して一人金八錢である。

【献膳料】　こゝでは社務所と燈臺守の家があるだけで、參詣者は總べて社務所に食事萬端申込むことになつてゐる。

日歸り參詣者の献膳料は、祈禱御符の含まれることは勿論で晝食の用意のない人には、用意を賴めばすぐ出してくれる。又一泊する參詣者には宿泊料をも兼ねることになつてゐる。

【等級は左の五種】

大々献膳料　金七圓以上

（名ノ板札一枚神號表裝物一幅）

大献繕料　金五圓以上　（板札一枚）
中献繕料　金三圓以上　（板札一枚）
小献繕料　金二圓以上　（紙札一枚）
献繕料　金一圓五十錢以上　（紙札一枚）

【御符と掛守】を社務所右手の神符授與所で授くる。

御符　永代守護　金五十錢
紅白水引掛　金十錢
立札　金五錢
掛守　みなるかね　金十錢
掛守　金五錢
財布　絹財布　金八十錢
木綿財布　金二十錢
神號表裝物　上　金七圓
下　金六十錢

表裏の兩巡路については、こゝには省き、神鹿群れ、野猿又狎るゝの神境に、山と海の双美を探り得る壯絶の勝地としてこゝに禮讃の一辭をもつて筆を擱く。

不忘山麓の温泉

【位置と交通】仙臺より南行三十分で、竹駒神社で有名な岩沼に着く。こゝで汽車は一は常盤線として海岸を一路上野に走り、他は進路を西南にとつて進む。此の車窓の前方右手に見える巍々たる山は、古歌に「みちのくの逢限川のあなたなる人忘れずの山の險しさ」とある不忘山で、藏王山とも稱し、御東ともいはれ、奥羽の脊稜山脈中の崇岳である。先づ大河原に下車する。驛前に、遠刈田、青根に客を運ぶ自動車がある。村田を通つて遠刈田に行く仙南軌道がある。いづれも上下列車から降りた温泉行きの客をのせて一日數回發車往復する。

自大河原 至遠刈田	自動車	一圓二十錢（約五十分）
	仙南軌道	一圓二十錢（約一時余）

大河原より遠刈田迄約六里、軌道は村田迄田圃の間を進み、そこで車輛を換へて小丘陵の間を

圓田永野へと緩傾斜を上つて行く。

自動車は江戸道中往來歌の「船迫とひしき人に大河原かはらぬいろはちぎる金ケ瀬」の歌通り、船迫から大河原に入つた國道通りの町を拔けて其儘三百年ティティと立つ松の巨木の間の平坦道を、左手に白石川の緩かな清流を見つつ進み、水密の產地たる宮村の村落に入つて左側に一叢の老松に圍まれた、近鄉の信仰淺からぬ白鳥大明神と刈田嶺神社を車中に拜しつゝ永野へと畑中の道を進む。永野よりは軌道も自動車も殆ど相交る一本道で、梨や桑畑の間、なだらかな丘陵に清爽な山氣を覺えつゝ右手に松川のせせらぎを聞き、又其上に美しき線を形つくる青麻山を見つゝ西へと進むのである。

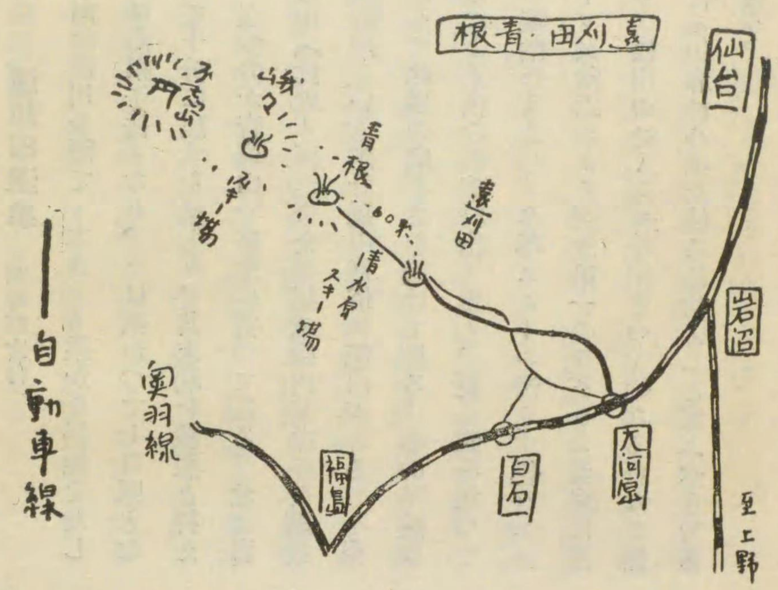
熊野岳

遠刈田温泉　刈田郡宮村

南は松川を隔てゝ大きくも柔かな斜線をなし上は烏帽子岳となり、下は擴がつて七日原となつて十分に陽光を樂しみ、其末端を毅然と押えて立つのが青麻山で略東に當つてゐる。北は岩崎山（此近く西北に金賣橋次橋內兄弟の金鑛發掘の跡といふ阿計羅山裡俗の籠山がある）を脊にして北風の騷しさを避けて居る。春の早蕨摘むによく秋の紅葉狩捨て難く、更に茸を採つて一盞酌むもよし。冬季スキーを滑らす絕好スロープ又附近にあり東北第一のラヂウム溫泉に浸り、松川のせゝらぎを聞きつゝ純なる朴なる凛たる山容に心境を練るは尙よしと言ふべきであらう。

玉色山

不忘山



【上の湯】 鹽類泉、精神病、皮膚病、婦人生殖器病、小兒病によく、透明無色。

【東の湯】 炭酸泉、腸胃諸病、痲氣、癲、氣管支、脚氣赤白帶下等に効あり。稍帶褐色あり。

【下の湯】 類泉、創造、挫傷、打撲傷、狂犬毒蟲咬螫毒等によし。

【旅館と經費】 温泉宿十二

金峰閣、我妻屋、村上、遠藤、大小室、いろは屋等。

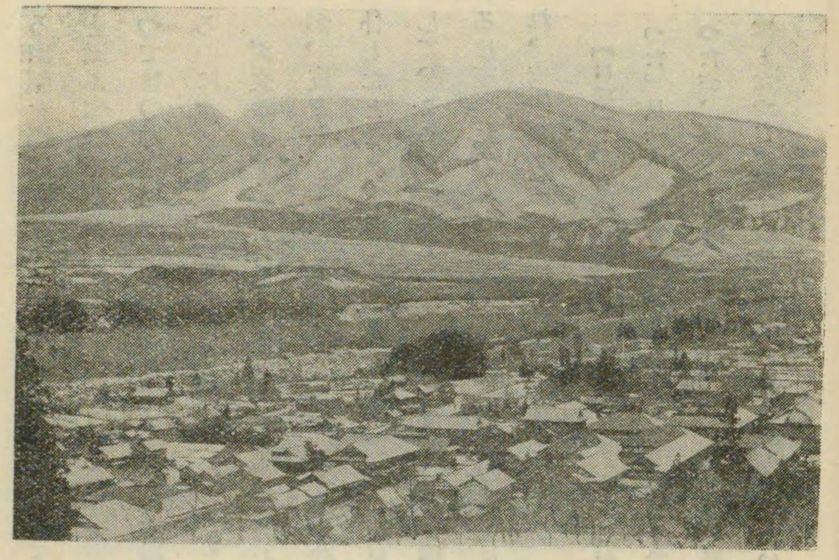
宿料二圓内外。晝食八十錢内外

自炊 三十五錢より各種。

【御土産と産物】、木地玩具、木炭等

青根温泉

柴田郡川崎村



遠刈田全景

自大河原 至青根	自働車	一圓八十錢(約一時間)

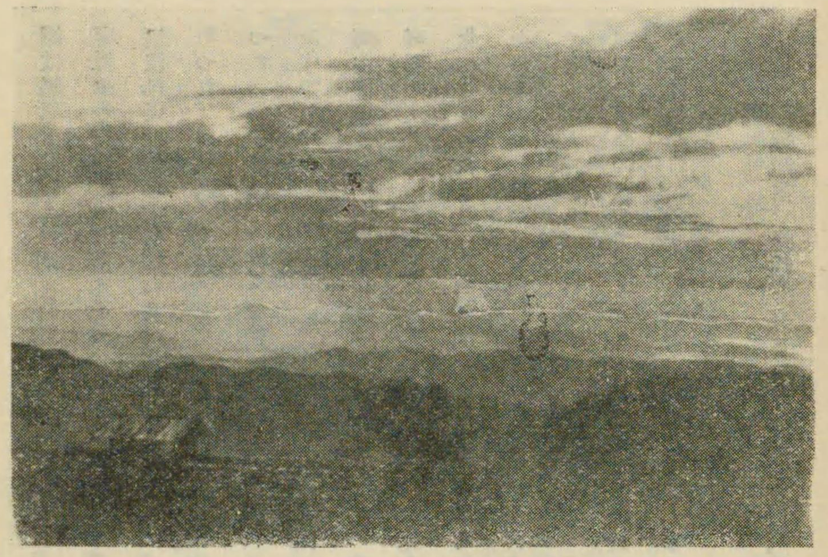
大河原より來つた自動車は遠刈田の街を通つて、北に寄つて西方に進む途中杉並木の半頃、左側に藏王山の登山口なる一の鳥居がある道は少し上り加減で、十數丁進むと右側の山の突端に出る。眼下に川崎の村落を見、遙かに仙臺から松島灣、金華山等を腑瞰する事が出來る。山の中腹を幾廻りかして、奥羽脊稜山脈を指呼の中に見る所に出ると、山開けた高所に青根の湯宿が見える。何時しか藏王山の中腹二千四百尺の高所に來て居るのである。脚下の丘陵の幾起伏の間に點在する村落と澎湃たる仙臺灣、大平洋の大海原は大自然の靈氣に包れて、只淸爽な

る山氣を漂はすのみである。然り靈氣たゞようと云ふべきである。試に二千數百尺の高所にあつて日の神の出現に對する時は身の壯嚴清淨たるのに、覺えず我を疑はざるを得ないのである。

天文の頃、前川村より來た佐藤彦惣丹野七平が、皮を剝いで簑を作るべく青木の大木を伐り仆したところ、そこに溫泉の湧き出るのを見出して、ここに初めて湯守となり青根の湯と稱するに至つたのだといふ。ついで名號の湯發見され、享保頃に至つて新湯が發見された。

【口碑】 奈良の都に藤原豐成卿といふ右大臣があつた。只一人の中將姫を掌中の玉と愛しみ育んで居つたが、姫七才の時、不圖した病から奥方は不歸の客となつた。親子の悲哀は他の見る目も痛ましい程

松川の奔流

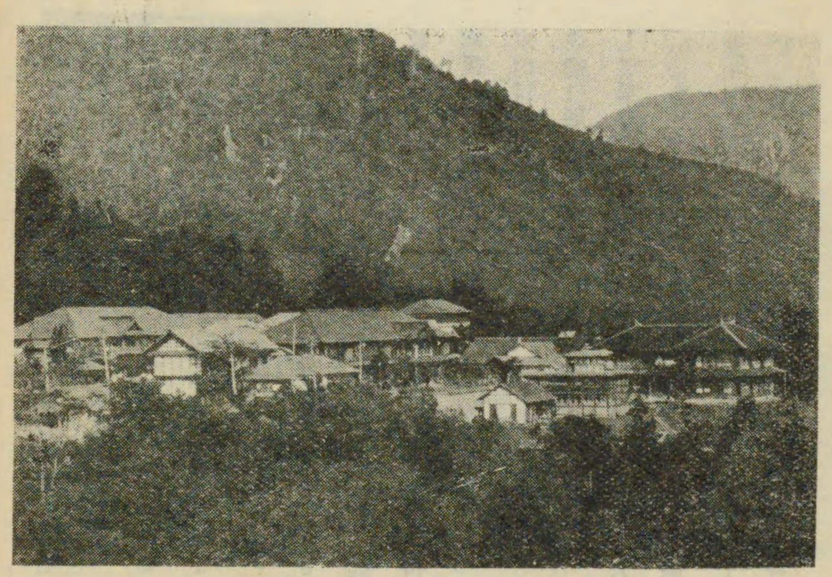


青根山より日瞰を望む

であつた。親一人に子一人は互を賴りに暮して居つたが、さる人の薦めで、豐成卿は、後添へを迎へることとなつた。そして再び一家の團欒を樂しむことゝなつたのだが、後の奥方に阿古屋姫が生れると共に中將姫は邪魔物扱ひされる樣になつた。いたいけな姫の無殘な忍苦は、いよい毒刄をもつて止をさされることとなつた。一人の家僕は奥方に命ぜられて姫を山奥に連れ込んで殺害することとなつた。併し家僕は姫の純無垢心には抗することが出來なかつた家僕は姫を山中に數年養つて居つたのであつた。豐成卿は姫の突然隱れ去つたのに驚き悲しみ、轉々として居つたが、或る時偶然狩獵に出て、成人した姫を見出し家に連れ歸らうとしたのであつたが、姫は悲を包んだ儘出家して法隆寺に入り尼僧となつたのであつた。遂に奥方の非行の露るゝ日が來た。豐成

卿は怒氣と悲哀とに悶々たらざるを得なかつた。出家遁生の一路に入らんとして居る時、奥方は病魔に襲はれて、頽死の病床に先非懺悔して冥目したのであつた。豊成卿は飜然として出家の旅に上つて仕舞つた。あとに殘つた阿古屋姫は只だ悲嘆に暮れるばかりであつた。風の便りに『父東國は在す』と聞いて阿古屋姫は只一人陸奥の國へ旅立つたのであつた。可弱い上の慣れぬ旅路に、憂き苦勞を重ねて、遙々東北へと下つたが遂に旅路に倒れて仕舞つた。それが今の柴田金ヶ瀬附近で俗に言ふ阿古屋の室が其處だと言ふことである。姫は川崎在の百姓に助けられて同家に厄介になつてゐるうち、附近の野山の散策のうちに見つけたのが、今の青根温泉だと云ふ事である。

（大湯）鹽類泉。慢性リウマチス、慢性關節炎、慢性



青根温泉全景

風、腦諸症、神經諸病、婦人生殖器病、皮膚病、創傷等。

【新湯】鹽類泉。金創、打撲、痼氣、蟲類咬毒、痔疾、腸胃諸病、赤白帶下、脚氣等。

【名湯】鹽類泉。婦人生殖器病、皮膚慢性諸病、痔瘻、眼病等。

【旅館と經費】不忘閣、青嶺閣、不忘館、名湯館。

一泊中食共五圓（一等）参圓（二等）貳圓五拾錢（三等）

自炊一日一人（席料、電灯、炭、浴場料、器具料）一圓（一等）九十錢（二等）八十錢（三等）七十錢（四等）六十錢（五等）

夜具一組　十五錢より七十錢迄

食費三食　五十錢より一圓三十錢位

【土産物と産物】木地細工、漆器、茸、山獨活、香魚、山百合、山芋。

峨々温泉　柴田郡川崎村

青根から一里半、遠刈田から二里半、どちらにしても歩くか、馬の脊を借らねばならない。遠刈田からならば藏王山の登山口を入つて弘法小舍の前を通り不動瀧から四五丁の山道を岐れて入

る。青根からなら濁川を越えて弘法小屋前で遠刈田よりの道と合する。西に寄つた藏王山の火口湖（お釜）より流れ出る濁川の谿谷にある海拔二千六百五十尺の高所、水と樹木に圍まれた幽邃な閑寂境である。ここで孤獨三昧境に自己の心身を照檢するのも又一興と言ふべきか。若し遠望のゆるす日ならば松島、金華山に視野を擴げ、一縷の想華に自己を托するのも、此處だからこそ得らるる思ひの一つであると、其天惠の幽境を謝する心になるであらう。

【鹽類泉】 胃腸病、皮膚病、婦人病、腦神經。

旅館は竹内一軒だけ、宿料一日一圓五十錢内外。自炊三十錢より。

不忘の峻嶺　刈田郡宮村

【位置と交通】 大河原或は白石より、遠刈田、青根への自動車或は軌道を利用して先づ遠刈田上遠刈田よりの登山道を記すことゝする。

青根に宿をとる。兩溫泉場よりの登山道は、弘法小屋で合する事になつてゐるのである。が便宜

不忘山の名は、往昔より奥州の名勝として、夫木集、八雲御抄、枕草紙などに見えてゐる。地理書の藏王山で、俚俗では御東と呼んでゐる。羽州の御西月山に對しての稱である。開山は文武

天皇の御宇、白鳳八年、役の行者によつてなされたと傳へられてゐる。初めての噴火は寛喜二年で數回に亘つて大爆發をなしてゐる睡眠火山であり複火山で、此の點で霧島山と並び稱されてゐる。標高六千七百餘尺、登山期は七月一日より九月下旬までとされてゐる。併し此頃は冬期最も雪の多い十二月末より翌春二月末位までは、スキーヤーの絶好走場として賽の河原一帶が樂しまれる樣になつて來てゐる。

普通夏季の登山者は、宿を二三時に出て、遠刈田の刈田嶺神社に御祓をうけて、登山證をもつて、登山道を進むことになつてゐる。勿論朝の八九時頃からでも登れぬことはないが、午後の雲霧强風を避けるためには早朝の出發を最も好しとせねばならぬ。遠刈田より青根街道十二三丁進めば左に入る道があつて石の華表が立つてゐる。所謂表口である。濁川を渡つて林道を少し進むと一ケの農家があり傍に清冽なる清水が湧出して川をなしてゐる。登山道に於ける唯一の冷泉でこゝを冷泉堂とも云ふ。清水原の好スロープを除々に上る。勾配自づと高まつて、いつしか七日原の牧場の天より流るゝ樣な美しい大斜線を眼下に見る樣になる。密林に入つて四五丁登れば弘法小屋（昨夏火を失して全燒、目下設計中の由）で青根から來る道と合する。數丁進めば三十丈の三階瀧、更に進めば、幅三間高三十丈の不動瀧がある。瀧を見るところに力餅を賣る小舍がある

此處を過ぎて四五丁、峨々溫泉への道が岐れる。(約十二町)此邊林道を拔ければ次第に高山性を加へ光景並ならぬを感ずる。海拔四千尺の高所である。新道小舍といふがある、登山券を改めて違算過誤なきを期してゐる。弘法水といふさゝやかな湧水もある。此の少し先に左すれば四里餘にして山形の上の山に行く岐路がある。登山者は勿論右をとつて進む。十町程にして眇茫たる賽の河原の一端に出る。石皆赫黑く燒爛れて第一期噴火のよき紀念をなしてゐる。大小の奇石累々として相重疊し、千態萬趣の塔をなしてゐるのは昔より今日までの登山者が血緣の冥福を祈るため積み上げたものの由。原の入口に地藏尊があり、其前には石を堆く積んだところに塔婆石碑が無數に立つてゐる。先祖代々とか居士大姉とか或は童子孩女とある法號を書いた塔婆が一面に並ぶ。俗にかいながら佛と云はれるところで、鉋屑薄片に法名を書いて供養するのが慣しとなつてゐる。道は累々たる岩石の間、多數の登山者によつて草鞋あとをつけられて自ら道しるべとなつてゐるし、これに添ふて指導標があり指導線がある。行方高原の上に更に高く錐狀の山が見える。即ち刈田嶽である。三途の川で草鞋を穿き替へ、巖間の水溜に手を洗ふ慣習がある。淨土口に行けば大黑天と弘法大師と安置され、脚下は一大谿をなして賽の河原を絕つて前面は五色山となる。左後方に熊野岳の雄姿が見え、下の沼は舊火口で、お釜と稱される。こゝより下つて此湖畔に

出、而して上るのを御澤がけと稱してゐる。御峯がけをすれば約半里程、胸突き十餘丁の急坂を上るわけである。頂上に刈田嶺神社の奥の院がある。

頂上の大觀は眼界四州に亘り、南、吾妻山、磐梯山を初め、西、最上川の銀帶を見、更に月山湯殿山、羽黑山を雲間に隱見し、東、太平洋の水天相連るを見る。松島、金華山の盆景又手にとるが如く見ゆる。

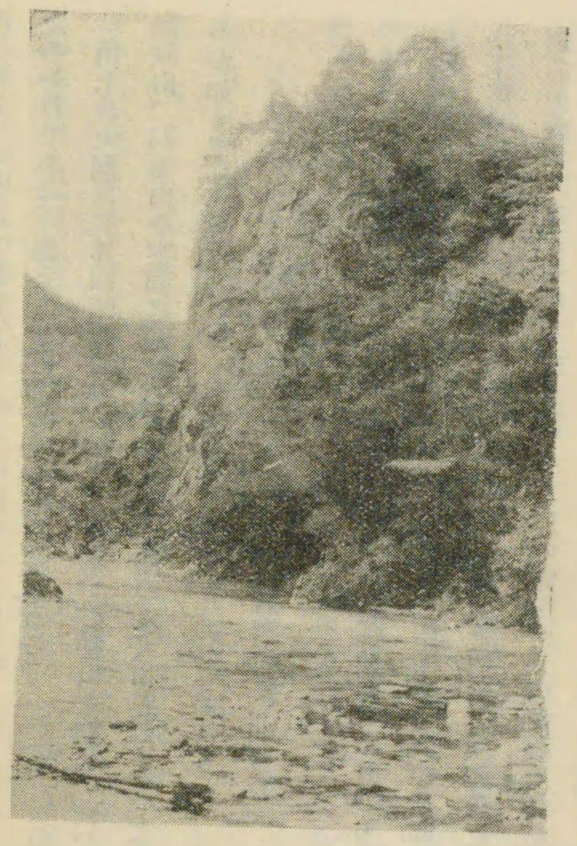
不忘南麓の溫泉

東北本線と常盤線の會合點たる岩沼を離る七哩西南、上野からは一八九哩福島より二十一哩藤田越河等の山地を下つたところ、不忘山麓の東南面に白石がある。伊達家の礎石と仰がれた片倉小十郎景綱の居城のあつたところ、今は麥粉、麵類等の製產地として縣下有數の町となつて居る。驛前の旅館又は近くに大抵、鎌先、小原の旅館の支店出張所があつて、溫泉行きの客を案內し、荷物の世話等をやることは大河原驛前と同じである。先づ仙臺地最書南の溫泉として小原に行く。

自白石驛至小原新湯　二里餘　自動車へ七十錢人力車金壹圓

小原温泉

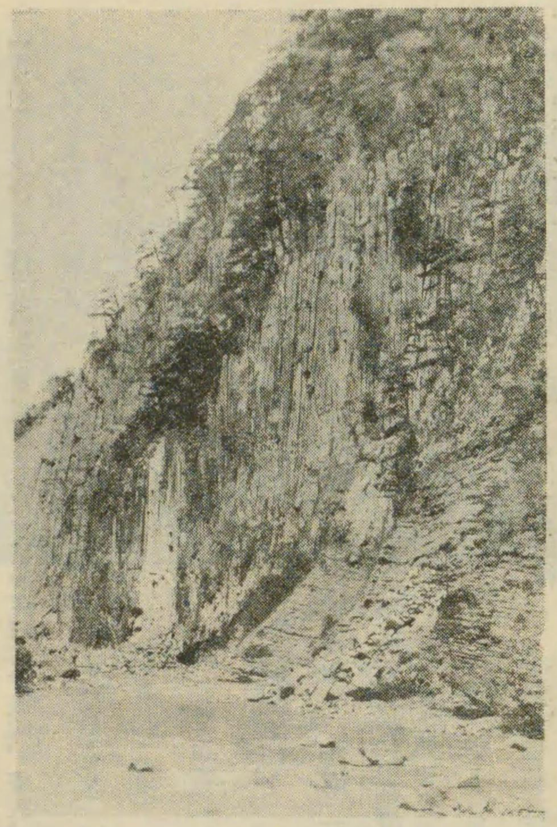
刈田郡小原村字明戸



入場岩

白石の主要な街々を通つて西北端に出ると、直ぐ感ぜられるのは、行方の幾かさなりの山々の谿谷にある小原は、案外に山間の温泉としては明るいところと言ふ感じである。それは右手を流れる白石川の川幅と、廣い河原とが山間を流れ出て急に開け、明け放した放膽性があるからなのかも知れない。此の川に添ふて立派な縣道は徐々に上つて行く。そして間も

なく、白石川の脚下數十丈のところに奔湍として白龍の如く青龍の如く踊るのを見るは道中の儲けもの〻一つである。殊に鈍圓塔の如き山と山との間から、不忘の峰を見るのは、又なく嬉しい。



木材岩

小原は、山に恵まれ、又水に大に恵まれたところと言ふべきである。枕流閣は所謂新湯と稱されるが、開湯未詳で現經營者の祖先は六十年來やつて居るのである。新湯の湯槽に浸つて清流の音を聞くは自然の音樂と言ふべきで、小鳥の囀りと共に又快ならずやと言ひたい程である。春、山吹、躑躅、山藤、山櫻、或は草花の咲く頃、水を眺むる時初魚の水に飛踊して落花を食むの狀は、極樂小原の特色の一つである。夏は瀑下に遊泳するもよく、秋は水色の

美の加はると共に萬山の紅葉いよ〳〵映える。冬山水の雪景又捨難く畫趣味をそゝる。

【新湯】鹽類泉。四十二度、神經性諸病、婦人諸病、痔疾、就中リウマチスに特効あり。(沈流閣)

【古湯】(上湯と下湯)弱鹽類泉。五十三度、腦神經諸病、眼病、痔疾、胃腸病、婦人病等(桂屋、泉屋)

他に小原鎌倉の湯あり。

宿泊料　二圓五十錢、二圓、一圓五十錢。

晝　食　一圓、八十錢、五十錢。

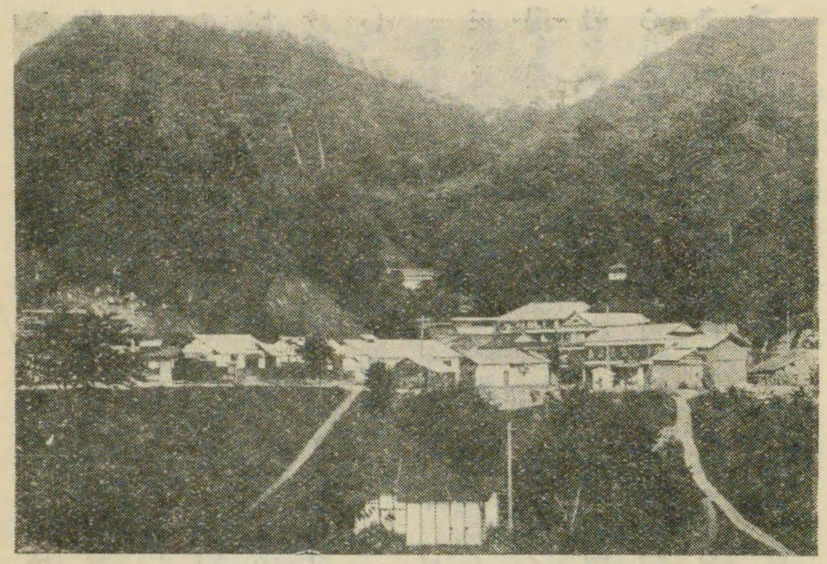
自　炊　三十錢より七十錢。

其他の川魚料理は此處の自慢ものである。特殊產物なし。

【附近の名所奇觀】大澤の瀧、入道岩、藥師堂等あり。西南二里强縣道添へに材木岩あり。千仞の斷崖、數萬本の材木を立て竝べたるが如く、清湍其脚に奔激し、相對する虎班岩と研を競ふ。

鎌先溫泉　刈田郡福岡村

白石より二里弱、五十錢の定期乘合自動車に依り、長橋を渡り、對岸の丘稜地に進む道に沿ふ

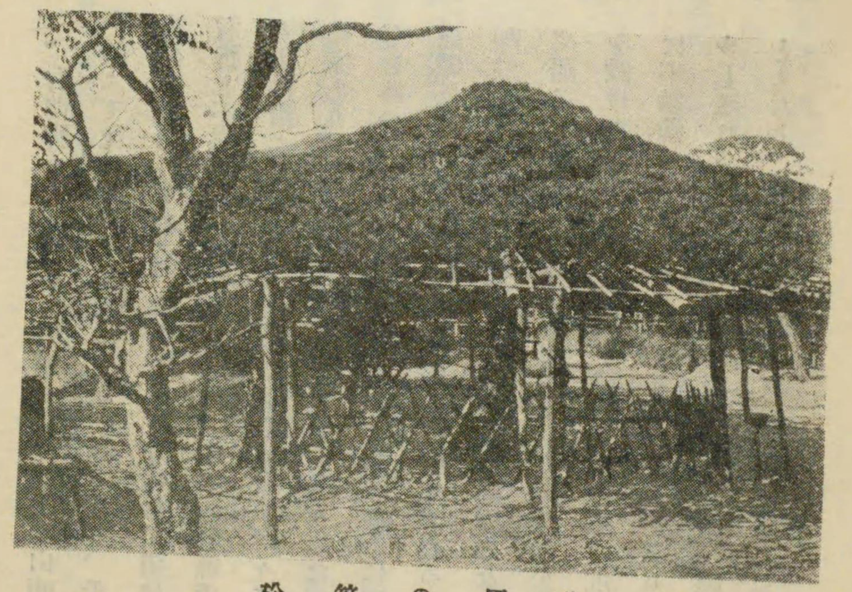


鎌先全景

て、右側脚下には白石川の淙々たる清流が山間を縫ふて流れ來り、或は潭となり瀨となり、千姿萬體を示してゐる。進むこと數分にして道は右折し不忘の嶺を仰ぎつゝ進む。小原への縣道も川に沿ふて彼方へと走つて居る。道中所々に農家あり、山行の氣も淡くどこやら慣々した感じを持つ。廿分で湯宿に着く、山間遙か下に國道の松並木見え、三方に小丘陵を控えてゐるが却つて散策にはもつて來いの氣樂な場所となつて居る。最近、各館主協力して共同經營の公園を設けたりして着々設備を整へつゝある。近くに不動瀧、沼瀧等あり蛸峰とか松岩とかあり、少し離れて陣場山があり、慶長の頃政宗の陣所ともなり、奥羽鎭撫總督參謀の世良修藏の墓と

傳ふものが山頂に建つ明治戊辰の時、大山格之助宛ての「仙臺藩を謀る」の密書を出して發見され、遂に福島の旅宿に襲はれて横死を遂げたのであるが、此の紀念すきべ場所で、明治戊辰から昭和戊辰迄の繪卷物を擴げ、更に次の戊辰を想見するのも強ち故なきわざでもあるまい。

緣起に云ふ所を聞くに、今から五百年の昔、正長元年白石の農夫某が山に薪をとりに行つて渴を覺え、水を求めのまんとして、鎌をもつて岩を穿つた所に溫泉湧き出たので、鎌先と稱せられるのだと。又一條旅館に珠殼と云ふ寶物があるが、形・茶釜に似て礫砂一面について居る。釜の土中に久しくあつた爲か。



公園の笠松

【泉質】 四十五度、芒硝、炭酸含有の食鹽泉。外傷性諸障害には特効著るしいものがあり、天下第一を稱して居る。他慢性筋及び關節リウマチス、官能性神經痛、輕度の脊髓病、婦人生殖器の慢性諸病によし。

【旅館と經費】 一條屋、木村屋、最上屋、鈴木屋。

宿泊料一日(晝食付) 五圓、三圓五十錢、二圓五十錢。

晝食料は 壹圓五十錢、壹圓、八十錢。

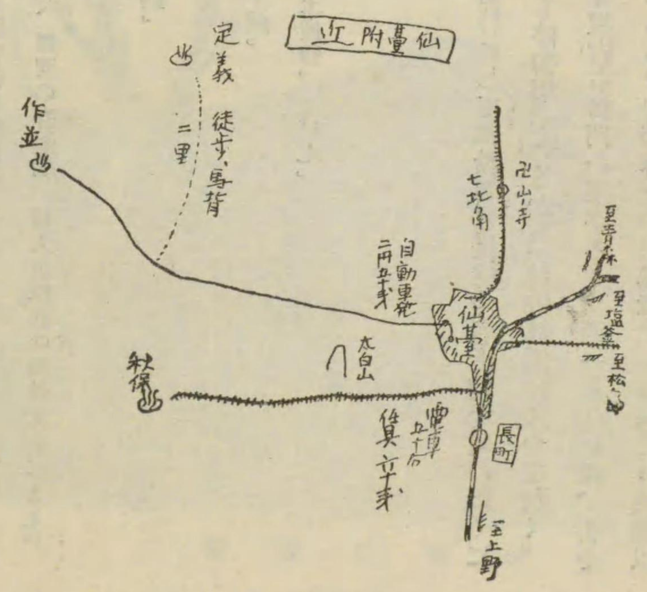
【自炊】 席、器具、電灯、布團料六十錢より一圓四十錢。

自慢の料理もの、鮎、早蕨、栗、茸等豐富にある。土產物、こけし。

仙臺鐵道に浴ふて

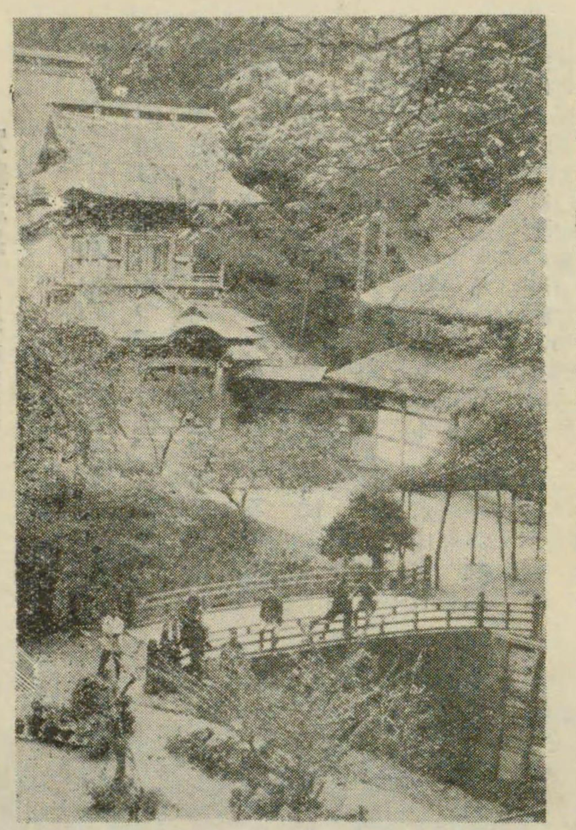
仙臺市通町の藩祖政宗を祀つた靑葉神社の下、素朴にして雅致多き堤燒の名產地堤町の近くに仙臺鐵道の初發點かある。市內御宮町東照宮の前にも停留場があるから、此の軌道によつて行く。途中道草を食へば、七北田には北牛町のところに寺坂吉右衞門の墓があり、西一里半には、書をもつて天下に鳴つた文武兼備の碩儒內藤以貫の墓がある。伊藤博文が李鴻章に「貴國には內藤以貫と言ふ大書家があるが、どういふ人か」と問はれて赤面したと言ふ事だが、東國二百五十年の

昔の人とはいへ、訪ふ人少く、知る人多からぬを殘念とするものである。古刹山の寺は洞雲寺と言ひ、慈覺大師の開基、日本三山の寺の一である。此寺を背景に夏は涼を樂み、秋紅葉の錦を愛づるのも一興である。富谷驛から一里のところに七ツ森と言ふ丸味を含んだ圓錐狀の七ツ山がある。山頂には皆藥師如來を祀り、紅葉に早蕨にもつて來いのところである。仙臺市の高所に上ると一望族の如く並んだ七ツ森がいかにも親しげに見える。吉岡町の八幡社には躑躅ケ岡の垂れ櫻と同種のものが數十株ある。軌道は更に北行して大衡迄行き、玉城寺原、色麻の棚及び古戰場、或はかつぱ明神や念南寺(ねやじ)の先住民族の遺趾等あるが、此邊で臺か森に入



ることにする。

通町吉岡間軌道　九十一錢　一時間四十分



洞雲寺殿堂

此の軌道は大衡より中新田に接續し鳴子線と連絡す。

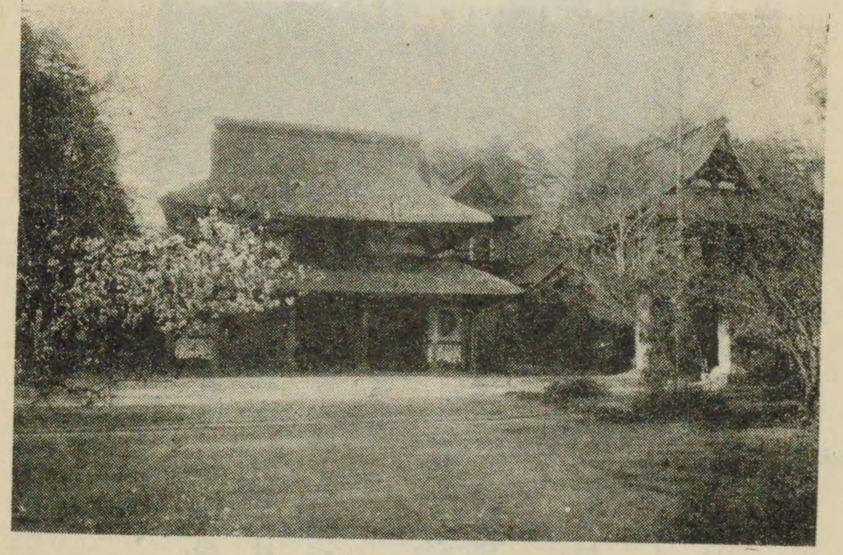
七ツ森七藥師の北麓、臺ケ森川の清流を控え、坐靜の閑境である。附近には小さいながらも四十八瀧があつて、散策を誘ふ。

【鑛泉】十八度のため加熱して用ふ。金創、打撲、疥癬、脚氣等によし。

旅館一軒　一日二圓より二圓半。自炊あり。

定義温泉　宮城郡大澤村

【位置と交通】　仙臺市八幡町から廣瀬川添へに作並街道自動車に依つて行けば、定義への岐點である熊ケ根から山路四里で達する。こゝで二圓内外を拂つて馬脊をかりて山行するのも面白い。仙臺の恰度西北、九里のところにある。八幡町より一里、郷六の部落より芋澤川を渡り大澤村を通つて行く徒歩道もある。七倉山を脊にする大倉村を過ぎると後白髪山の俊峰が巍然と聳ゆ。秋、紅葉の綾織は獨特だとの聲が盛である。温泉はその南麓、廣瀬川の支流激湍をなすところ、左岸に旅宿、右岸に浴槽があり、朱



洞雲寺佛殿

塗の欄杆橋を渡つて浴場に行くのである。自然の岩窟に堀り込まれた四疊半位の浴槽は古びて原始生活を思はしむるものがある。

定義如來に祈誓をこめつゝ入湯又妙と云ふべきか。湯川の大瀧や、材木岩、天狗橋の奇勝等、山の匂濃厚である。

【泉質】　鹽類泉。三十九度。

逆上、頭痛、精神病、神經衰弱、眼病、痛風、皮膚病。

【旅館】　二軒。宿泊料一圓半より二圓半。自炊あり。

作並温泉　宮城郡廣瀬

自仙臺至作並	（七里）自動車　二圓五十錢

【佐置と交通】　仙臺市の西端、八幡町には、政宗が仙臺城を開いた時、前領地福島の伊達にあるを招請したといふ豪壯な意氣を示す桃山風の大崎八幡宮がある。正月十四日には、市内酒屋の

杜子連が寒中裸參りをし、或は市民の松焚きの行事がある。應神天皇他二神を祀り、お祭りは、秋季九月十五日。

脊稜山脈の餘勢延々と西より迫つて、此處八幡町で、急に廣濶な平野と開けるのである。從つて仙臺を後に西行、北による作並は、厭でも應でも山間の道路を巡らねばならぬ。幸に縣道でもあり、自動車も通り、廣瀬の清流が、或は奔湍となり、せせらぎとなつて吾人の耳目を樂しましめて呉れるから、山道の單調さは、さう物倦くもない。七里にして達する。浴槽は岩石を抉いて湯を湛へた古雅愛すべきもので客室より百八十段の長廊下を下らねばならぬ。

【瀧の湯　鶴の湯　龜の湯】　鹽類泉。五十度乃至六十七度。胃腸病、氣管支炎、脊髓病、リウマチス、婦人病、感冒豫防、外傷等。

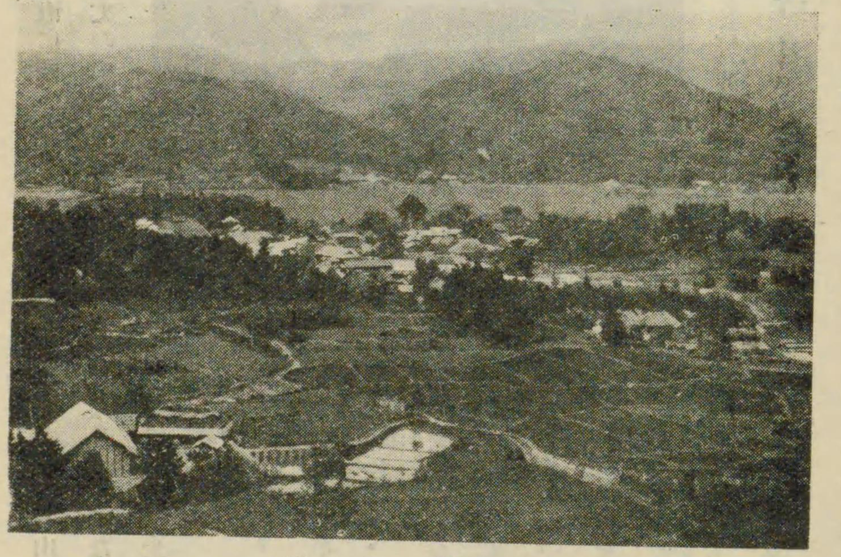
【附記】『鳳鳴四十八瀧』は東南一里、棒目木附近にある。西北二里半にして、陸羽の國境『關山トンネル』に至る。

【傳說】行基菩薩諸州雲遊。此の地に來つて溫泉の湧くを發見したりと、又、建久年中、頼朝東征の折箭創を受けた鷹、湯に浴したとも傳へてゐる。

【旅館】岩松屋外二軒　一泊一圓半より二圓半。自炊の制あり。

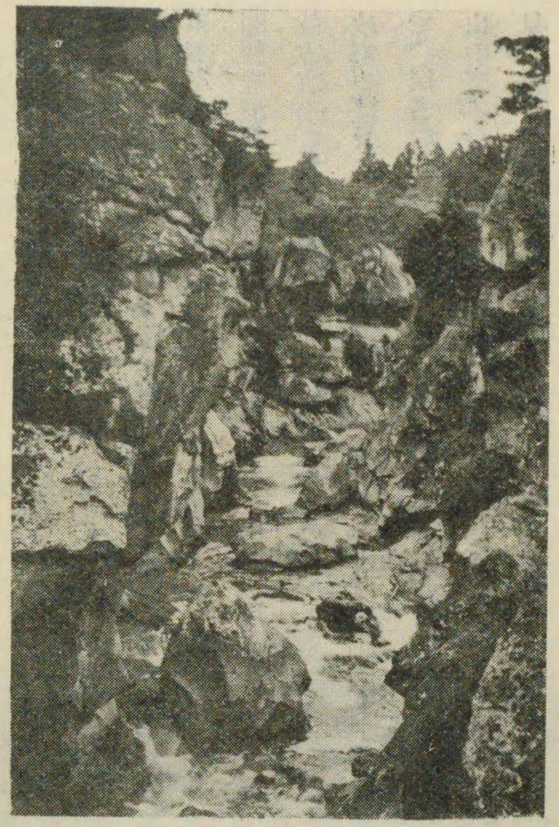
秋保溫泉　名坂郡秋保村湯元

【位置と交通】仙臺の南、廣瀬川を隔てた町續きの長町驛で、下車すれば、三丁程北に戻つて秋保電氣の停車場がある。秋保、湯元迄の乘車券を求むれば六十錢で、四里十丁の所を一時間餘で溫泉場迄ひとりでに行く。町裏の田園の彼方右手に見ゆる小高な丘稜は、三百年の昔、政宗の經營した青葉城の東南翼たる大年寺の山で、同名の寺と伊達　四代以後の靈廟がある。山の突端に上り、廣瀬川と宮城郡平野を眼下に見、平野と藍色を以つて區限つた。太平洋の波頭おどるを見、更に阿武隈山脈、奥羽脊稜山脈の白皚々たる山岳を望見することは特殊な大陸



秋保全景

的な味ひさへするのである。電車は此の山麓を眞直に西へと走る。名取の川、沿岸の靜かな山相を寫して清らに流るゝが元にあるかと思へば、數丈の中腹を走ることもあり、壯大さとてはないが、山水の調和ある風光がつき〳〵と展開する、一時間程にして湯元に着く。此のあたり、山も大部迫り、川音の涼しく聞えるは、流の石、山に分け入つた事を感ぜしめる。西北三里に馬場流瀧原の大瀧(高さ二十四丈)のあるを見ても相當の高所になつて居ることが分る



名取川

【傳說】 人皇第三十代欽明天皇、皮膚病を患はせられた時、奏聞するものあつて、遙に此の湯を汲みとらせられ、御入浴あつた所御恢癒せられ叡感斜ならず『おぼつかに雲の上迄見てしかな鳥のみ行かば迹かたもなし』の御製を賜つたので、それより名取の御湯と呼ぶに至つたのだと。又覗橋、羽山權現、靜ケ窪(靜御前の墓と稱する碑がある)等ある。

直盛の二子資盛の曾孫基盛が源氏難を避けて此の地に來り、其の隨從の武士の開湯だとも傳へてゐる

【御　湯】 鹽類泉。五十五度　胃腸病、脚氣、婦人病。

【神嘗湯】 同　四十八度　皮膚病と火傷

【大湯及河原の湯】 鹽類泉。五十五度　皮膚病、リウマチス。

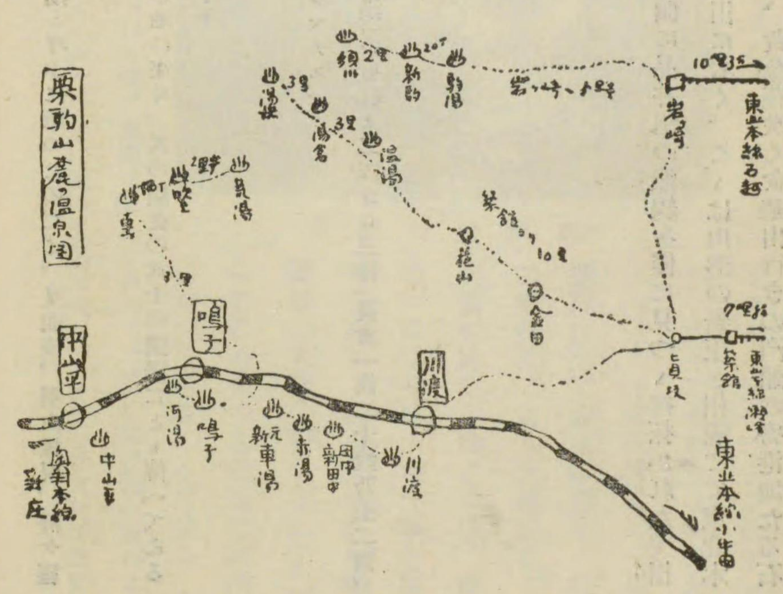
【旅館】 佐勘、佐藤屋、水戸屋(御湯)　岩沼屋(神嘗湯)いづれも二圓から三圓。晝食一圓二十錢乃至二圓。自炊寢具料一日一圓半乃至二圓。

お土產　こけし這子。

玉造五湯と荒雄川

仙臺から北行して松島驛を過ぐると汽車は、左側に品井沼の銀線を僅に見つゝ打拓かれた美田のうちを進む。そして鹿島臺、松山を過ぎて小牛田に着く。こゝは山形の新庄と相隔てて東北本線と奥羽線を結びつくる陸羽東線の初發點であり、黃金花咲く金華山行きの汽船の寄港地たる石

卷への石卷線の出る所である。都合によつては陸羽東線への乘換へを利用して、一汽車遲らして山の神社に詣でて子のない人は子寶、或は安産の祈願をするのもよからう。社前に額いてお守護札を享けて再び乘ると、汽車は西へと進み中新田（こゝは仙臺鐵道の終點近々完成聯絡の筈）より北へ折れて西北行する。荒雄川の清流が河原石にせせらいで旅情を慰めて呉れる。岩手山に入ると丘稜の起伏が自づと目立つて來るが、それも荒雄川河原に興を添へるためのものと思へる程度のものである。山丘の起伏愈々繁くなる。昔名馬池月を産したと傳へる。池月は此の産馬地帶の前線とも言へるであらう。所謂此邊の馬つ子が、野間に草を食んで居るのを見受



けられる。小黑崎の勝景を右側に、荒雄川を左側にして進む間なく川渡驛につく。約一時間半を費したわけである。

川渡温泉　玉造郡川渡村

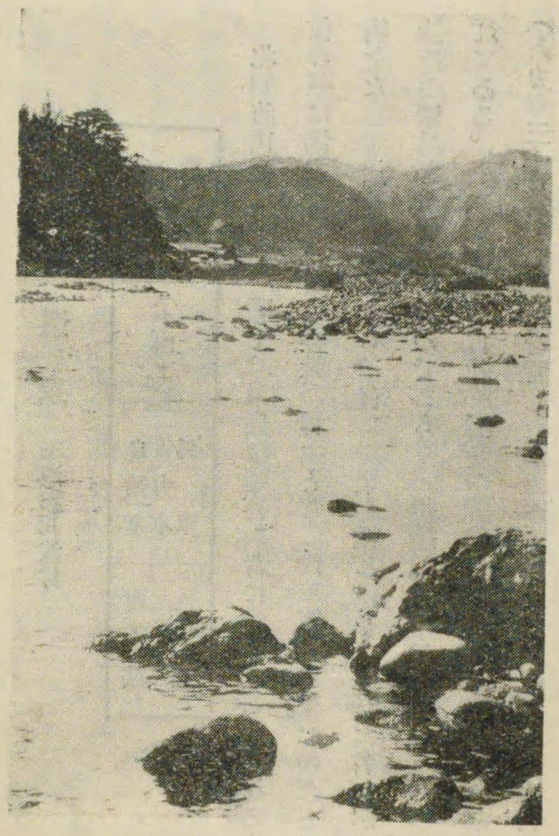
自川渡驛 至同温泉	（十四丁）	自動車　四十錢 人力車　三十錢 馬車　三十五錢

北羽前街道に沿ふ一驛で、温泉は延喜の昔に發見せられて居ると享保頃の文献に見ゆ。今の旅館の祖は湯主たり、温泉神社の神主として代々傳へて來たのだと云ふ。明治十五年頃三四戸の小街をなして居るといふから、昔時行樂を欲しいまゝにした名殘が、「脚氣川渡」の巷碑と共に今百餘戸の繁昌をなして居るのであらう。伊達龍山の命によつて掘つたのが、眞癒の湯だとも傳へられてゐる。東六丁にある古刹祥雲寺の背後にある數丈の三階白絲瀧や、東南十八丁の圓き小黑崎（人力車三十五錢）の紅葉を賞しながら多くの人が杖を曳いて來たらしい。

【大　湯】　硫黄泉　百三十度。脚氣流注腫、痛風、疝氣、婦人諸病。

【眞癒の湯】　鹽類泉　百九度。氣管支加答兒、淋病、白帶下、腺病（以上藤島）

【新　湯】　硫黄泉　脚氣リウマチス特効
【瀧の湯】　硫黄泉　神經病、胃腸病、婦人病　支倉旅館　宿泊料、二圓より三圓、自炊あり。



荒雄川の清流

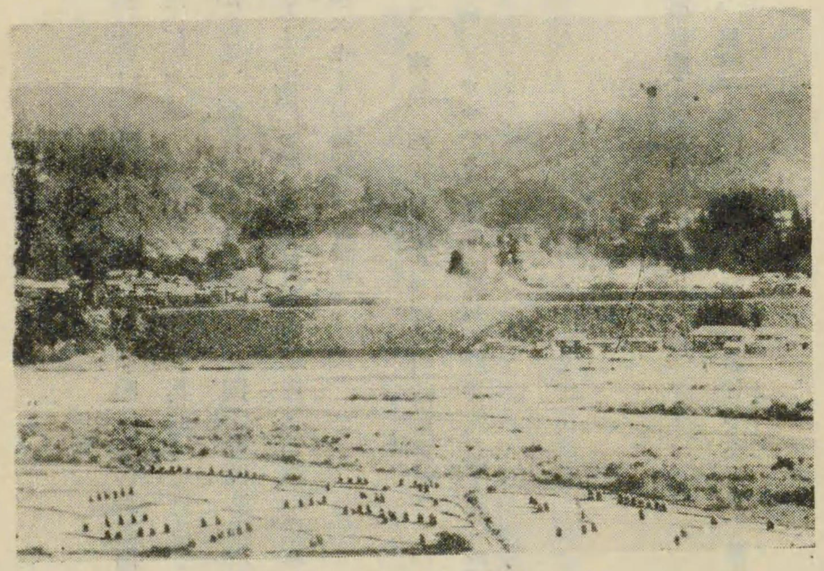
鳴子温泉

【鳴子五湯】　湯元、河原湯、多賀湯、新車湯、元車湯。

【附近】　川渡村―赤湯、新赤湯、湯坂湯、田中湯。

【位置と交通】　鳴子五湯は、温泉郷鳴子の總稱である。川渡より西北行した汽車は荒雄川の鐵橋を渡り、左右に田中、赤湯、元車、新湯等の温泉町と廣告板を見つゝ進むこと二十餘分、荒雄川の左沿岸高く、由容急に迫る中腹の鳴子驛につく。下車して左に曲

る坂道を一町出ると所謂鳴子湯元温泉のある所である。一帶の街をなして五湯を含みて鳴子町と稱し、八百の戸數を有する一市街である。今より殆ど千百年前仁明天皇の御宇承和二年四月潟山震動したること數日、斷崖崩れ、熱湯各所に湧く、依つて此山朝廷に奏聞したので、同年十月從五位に叙せられ神に祭られて鳴聲湯と號したと文獻は傳へて居る。後温泉神社と改祀した。又文治元年、義經頼朝の激怒に觸れ、遁れて奥州平泉の藤原秀衡の下に身を寄せんとした時、龜割峠に一子龜若丸を生む。併し、羽州は怨敵の地の爲に遙に此の地に來り、温泉をもつて産湯として。龜若神前に啼聲を發したので鳴子の湯と稱へられ、慶長の頃に至つて鳴子と改



鳴子全景

められたと言ふ。

【湯元温泉】 鳴子驛を上つた高丘を鳥谷ケ森と稱し、温泉數ケ所に湧く。鳴子町の最高所に當る所で前角に荒雄川及其支流を隔てゝ北方目睫の間に雄姿毅然たる花淵山と其連峰を見る。温泉の後丘、山路を南すること十五丁の所に潟沼がある。海拔二千尺、周圍六百四十間四方の粹鬱、湖面に映じて幽碧の閑境となす。ために人「底なしの沼」と呼んで恐れをなすと。四季の樂みとして蕨狩、魚釣、水泳、茸狩、栗拾ひ、狩獵、冬スキーの好練習場あり。

【鰻湯】 アルカリ泉 痔疾、脚氣、リウマチス、疝氣、淋病、脊髓病、婦人病(横屋旅館)

【鷹の湯】 鹽類性疏黄泉 百二十度。慢性皮膚病、リウマチス、痛風、腺病、肝腎病、婦人病、梅毒、鉛水銀中毒(高野屋)

【新鰻湯】 (同前)遊佐旅館

【竹の湯】 (同前)桝屋旅館

【源藏湯】 酸性泉 劇性の粘液漏、癩病、梅毒性諸症(大沼館)

【瀧の湯】 疏黄泉 六十度。梅毒、リウマチス、腺病、皮膚病 打撲、淋病、萎黄病(高野屋、遊佐屋、大沼屋、横屋各旅館の共同經營)

【賜の湯】 源藏湯に同じ(鳴子ホテル)

【松の湯】 同(松本屋)

【各旅館】 一泊一圓八十錢より七圓迄、晝食七十錢より三圓、自炊五十錢より三圓迄。

【土産物と産物】 漆器、木地細工。

【河原湯】 鳴子驛西方三丁、崖下荒雄川の河原の上にあり、八重雲抄にある玉造湯は河原湯を指して言ふとも言はれて居る。居ながらにして山と川の春秋を貪ることが出來る。夏は河原風を十分に樂しめる。

弱鹽類泉 百二十度。内容として胃腸加答兒、浴用として筋及關節リウマチス、慢性濕疹、ヒステリー脊髓勞、婦人病、腺病。

【東北河原内湯二旅館】 一圓八十錢より七圓迄、自炊五十錢。晝食八十錢より一圓五十錢。

【多賀温泉】 鳴子驛より左折東行四丁、荒雄河畔、河原湯と同じく、東西に分れた旅館、略同じ。

【新車温泉】 鳴子驛より左折東七丁、大澤山を背ひ、前面荒雄川の景を見ることは、五湯共通と言ふべきである。こゝから鬼首街道岐れ、鳴子橋を渡つて鬼首方面に行かれる。

◇鳴子驛より新車温泉まで、自動車二十錢、人力車二十二錢。

【龜の湯】 鹽類泉　百三十度。胃腸病、神經性諸病、筋及關節リウマチス。

【菅原の湯蒸し湯】 腺病、濕疹、ヒステリー、婦人病（高繁旅館、菅原旅館）

一の坂温泉樓　館廓内に近來間歇温泉力發見せられ、三十分毎に熱湯を噴出、二三丈に及ぶ。泉質同前

【旅館と經費】 一圓八十錢より七圓、自炊あり。晝八十錢より一圓五十錢。

【元車湯】 殆ど新車湯に接して居る。附近辨天の名所がある。

【幸能の湯雲泉の湯、洗心の湯】 鵜淵の湯等は鹽類泉又は單純泉、百三十度。

【旅館と經費】 金忠、三階、二階――一圓八十錢より七圓迄、晝食　八十錢より一圓五十錢自炊同前。

赤湯温泉　玉造郡川渡村赤湯

【位置と交通】 鳴子驛より羽前街道東行十四丁、越戸山を背ひ、荒雄川を狹んで三條、離森の二山に對し、又半島の如き小黑崎を見る。山と水とに惠まれた廣濶な地域である。往昔、赤梅の里と稱されたところで、後轉じて赤湯の名をなし、赤湯神社も見らるゝに至つた。享和文化の頃

脚氣川渡かさ鳴子の昔語に伍して特殊の地位を占め、それ等に比肩するの地位を持して居つたのである。仙臺侯或は岩手山城主、或は夫人方等の遊浴場として、御殿杯建てられたのは此間の消息を優に物語つてゐるわけである。早蕨とりによく、魚釣りによく、茸狩りによく、雉子兎等の遊獵によし　積雪の候中山から鳴子、赤湯、川渡にかけて、好スキー場となる。散策には川渡に向いて白絲瀧あり、古跡不割梅あり、古刹祥雲寺あり、對岸には古刹洞川院や三條山の古跡があり、テニスコートがあり、室内娯樂機關備はり些の倦む所もないわけである。左の八湯あり、各々特色を持つ。鳴子驛より十五町自動車人力車三十五錢。

【御殿の湯　子持の湯】 炭酸泉。五十三、四度、慢性胃腸病、神經性諸病、脚氣、疝氣、痛風。

【龜湯　鶴湯　松湯　梅湯】 鹽類泉。胃腸病、婦人病、腺病、リウマチス、濕疹、ヒステリー、脊髓勞（大正館）

【目の湯】 弱鹽類泉。筋及關節リウマチス、脊髓勞、婦人生殖器病、糖尿病等によし（大沼屋、片倉屋）

【片倉の湯】 弱アルカリ泉

【勘七湯　子寶湯　新湯】 單純泉　六十度。慢性筋及關節リウマチス、慢性濕疹、官能性神經病、中樞及末梢性麻痺、婦人生殖器病、外傷性諸傷害。

【旅館と經費】 泊料　一圓五十錢より二圓五十錢。晝食　八十錢より一圓五十錢。自炊　電氣室料湯錢六十錢、五十錢、四十錢、三十五錢、布團絹物三十五錢、瓦斯物二十五錢。寢卷と下着は絹物三十錢瓦斯物十五錢。炭は時價に依るも一箱にて三十錢二三日使用し得らる。

勘七旅館　大正館　大沼屋　菅原　遠藤等あり、甲乙あり。

新赤湯溫泉

玉造郡川渡村赤湯

赤湯溫泉の東二町、荒雄川第二鐵橋近くにある。

鳴驛子より新赤湯迄十七丁、自動車三十五錢、人力車四十錢。

宿泊料　一圓八十錢より三圓五十錢、晝食一圓以内。自炊を主體とし三十五錢より八十錢迄。

附近――東一丁に湯坂溫泉、高友旅館の内溫にして効能殆ど赤湯と大差なし。

内湯アルカリ泉は飲用、胃腸病、肝臟疾患、咽喉氣管支カタル。浴用　リウマチス、神經病、婦人病、肝臟病、肋膜炎、痛風、糖尿病、皮膚病によし。

田中新田中溫泉

玉造郡川渡村

【位置と交通】 鳴子驛より東南二十町、川渡驛より西一里餘、鷲巢、胡桃、越戸の連山に抱擁せられ、前方に荒雄川を隔てゝ三條、離森、六角峠に對する故相當廣濶さを樂しめる。

自鳴子驛より	自動車	四十錢
至田中溫泉	人力車	四十錢

【田中湯、ふかし湯、瀧の湯】 等大小八槽あり。炭酸泉、弱鹽類泉、アルカリ泉、單純泉、食鹽含有アルカリ泉の五種。

リウマチス、神經痛、胃腸病、脊髓、腺病、外傷性諸障害、婦人病、小兒麻痺、攝護腺炎、神經衰弱、咽喉及氣管支カタル。

【旅館】は高友、田中旅館の二軒。一圓八十錢より四圓、晝食七十錢より一圓八十錢。自炊五十錢より三圓

【みやげ、のと物産】 木地細工、漆器、鑛泉煎餅、木材木炭、鑛石、疏黄。

荒雄川の上流

鳴子驛から左折六丁して、新車湯の前を通つて、荒雄川に架せられた鳴子橋を渡つて、山行秋田縣に入る縣道に出る。山添ひに作られた河畔の道路だが案外にいゝ。川の向ひが、元車、河原等鳴子五湯で、更に進んで、緩るい曲線を描いて川岸に突出した邊を左回すると川は、前面に花淵山を挾んで右折し、一流は中山平への鐵道に沿ふて脊梭山脈へとつゞく。此の川の分流點、鐵路の傍に仙臺領より羽州に通ずる有名な尿前の關趾がある。俳聖芭蕉が奥の道を探つて、非常な困苦を嘗め、

蚤しらみ馬の尿する枕もと

の句を殘したところである。流石の超脱者も蚤しらみと濕臭には弱らされたらしく、二日の雨に降りこめられ、山中の農家に宿つた樣躍如たるものあるが、今は更に面影の偲ぶ由もないのである。僅に山の峻秀を目前にして、其昔を追懷するのみである。鳴子驛から西二十町だから俳聖を偲ぶ散策もよろしい。その彼方に中山温泉あり、上星湯、星壽湯の二湯あり、いづれも硫黄泉七十度前後、中山平驛より約十丁。山深く紅葉の美は此の温泉鄕中第一であらう。冬の好スキー場として、上野々のスロープと共に鐵道局の天下に紹介するところである。

突端を右曲した道は、坂路となつて進むこと少時にして忽ち、脚下遙に荒雄の本流を見下ろし

花淵の雄大を目睫に賞しつゝ右側の高原に、流石牧馬の盛なところらしいといふ如き感じを抱きつゝ進む。坂路も非常に緩かで殆ど坦道を進むが如きものである。やがて斷崖の邊に立ち、絶壁の下に清き流れを瞰觀し彼方の明るきあたりに、白く、ゆるく、荒雄の上流が流れてゐる。流は遠く右に曲つて荒雄嶽の裾を廻り、左手に高く見えるは禿の名に相應しい禿ケ嶽である。縣道は稍下つて、山麓にして河畔なる轟温泉に至る。

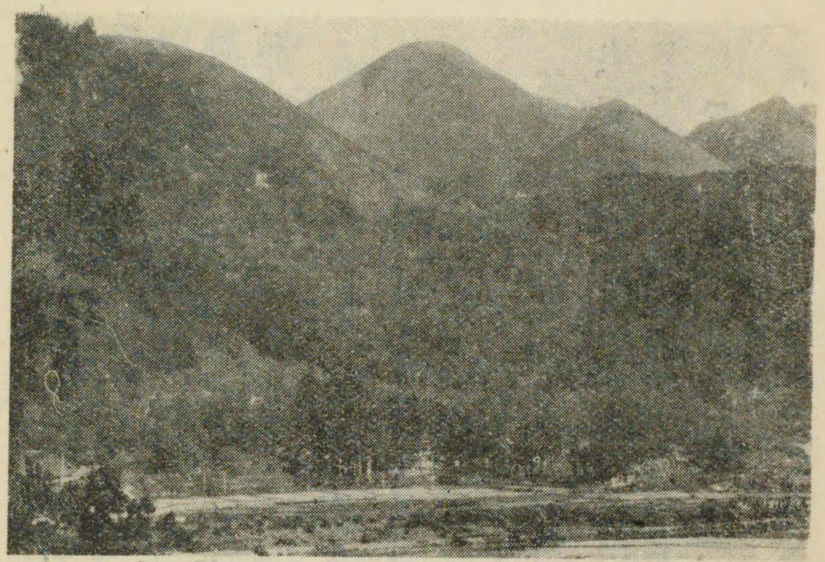
轟　温　泉　玉造郡鬼首村轟

鳴子より轟まで	約三里	徒歩

元和の頃頗る繁昌した湯だとは文獻に見えるところだが、河水の增減によつて、湧出量左右され、温度も變り、殊に冬期に著しく減少するので、自然衰退したのだらうか、嘉永年間高橋某再興して今日をなしてゐる眺望によく、高原性の雄大さを味ふ好適の所といふべきか。

【泉質】鹽類泉　五十三度。上衝、眼病、腸　諸病。

泉主一軒、主として自炊。



荒雄河畔三條山

【轟の新湯】 二丁程のところにあり。轟湯と同樣

【荒湯】 硫黃泉 六二二度。轟より三里荒尾上流

【吹上間歇泉】 轟湯の河畔に下らず、斷崖の岸の小徑を、右側に草原を見つゝ登り進む。約十二丁、林の少しく開けたところに着く、泉主のあるところである。その前に、水苔をつけた巨石を洗ふ流がある。溫湯にして入浴することも出來る。樹蔭の下に衣服をぬぎ捨てゝ、身一つ入るゝに程よい瀧壺の如き自然堀の凹所に入り、溫に浸りつゝ碧空を心ゆくまで眺入るのも原始的な興味がある。間歇泉は、流れの傍にある大凡二間許の岩石の凹所がそれである。熱のため岩は乾いてゐるが地下に絶えずゴト〳〵してゐる。噴騰するのは約二時間毎で、轟々の聲

と共に一丈四五尺噴揚する。終れば一雫の滴るなき有樣である。

口碑は、應神天皇の皇女故あつて、此の地に流寓し給ひて發見せられたものだといひ、又、弘法大師、錫を此地に曳き溫泉の効と浴法を里人に示されたと傳へてゐる。

【泉質】 鹽類泉 九十三度。眼病、上衝によし。泉主一戸あるのみ。

栗駒五湯の一

駒の湯溫泉 栗原郡栗駒村

【位置と交通】 東北本線、宮城縣最北の驛は登米都石越である。こゝに汽車を捨てて、一歩栗原鐵道による時は、已に身は栗原郡に入る。蚊帳の名產地として聞えた若柳を經て、大岡金成を過ぎて軌道の終點岩ヶ崎町に達する。こゝより二里程の間は三迫川の奔湍を脚下に見つゝ進むと約六里半、新湯澤の溪間、海拔二千尺の高所に駒の湯あり、更に十五丁にして五百尺を上り新駒の湯がある。此の邊一體國有林の潤葉樹密生して居る。秋、紅葉の樹間に、行者ヶ瀧、雄瀧、雌瀧或は窓瀧等數十丈の飛瀑を見るのは壯快でもあり痛快でもある。こゝより一里にして栗駒頂上、二里にして須川溫泉へ行く。

【泉質】硫黄泉　四十一度。皮膚病、梅毒、婦人病、リウマチス。
【旅館と經費】兩湯に各々小野寺、佐々木の湯主あり、一日一圓五十錢より二圓、自炊の便あり。

栗駒五湯の二　栗原郡花山村

【溫湯溫泉】東北本線北行して小牛田より田尻瀬峰へと來る。こゝは仙北鐵道の交叉點で、一は東行して北上河畔登米に至り、一は西北行して伊豆沼を右側に眺めつゝ、栗原の主邑築館町に至る。築館より西行一迫町を經て縣道を右にとれば迫川を脚下に見つゝ、金田、花山へと西北に入り、右側の鑛山地帶より道は稍傾斜を增す。十里にして、溫湯溫泉に至る。群山四面を圍み、巨石磊々たる所に溪あり、老樹欝蒼として迫り、眞に幽仙境と言ふべきである。

一鹽類泉。六十度胃腸病、創傷、梅毒、毒蛇咬傷等によし。

【湯の倉溫泉】こゝより三里上りたるところにあり、鹽類泉、六十六度、上下湯濱溫泉、四里餘、栗駒南西の山頂を殆ど犯さんとするところにあり。

鹽類泉。上湯濱は六十六度下湯濱は七十三度。適性、溫湯稍同じ。

須川溫泉　岩手縣西磐井郡嚴美村

【位置と交通】五千三百餘尺の栗駒山(須川岳)を駒湯より二里北に入れば、三千六百餘尺の須川溫泉に出る。岩手縣の西南界にあたる。

東北本線を北して石越より岩手縣一の關に下り、こゝより、西方に道をとりて磐井川を渡り圃丘の間を嚴美村五串に至る、二里十丁弱である。此のあたり、稍山丘を成して、峻嶺須川より來つた淸泉は、奇巖怪石の磊々たる、重疊たる山狹となつて、飛泉となり、深潭となり、飛沫をとばし、岩上の柳、櫻、松、躑躅の花綠と相俟つて所謂五串の瀧と稱され、嚴美溪と謳はれてゐる

一ノ關よりは、自動車(片道一圓五十錢)馬車(一圓)人力車(一圓五十錢)により、西行五里强同村湍山まで、馬脊によれば三圓五十錢、人力車約五圓で來る。あとの山路六里弱は急坂、强力を賴めば約八圓を要する。健脚家は徒步によつて、額に汗しつゝ山容を樂しむ方が興がある。栗駒西北中腹の溫泉は、廣濶なる高原をなし、西、雲表に聳ゆる鳥海山を遠望し、東金華山の突端を見る。附近に死出の峠、賽の河原、血の池地獄、三途の川、劍の山、大日石、焰魔大王石等の物凄い名所がある、傍の硫黄山と共に、昔時多數の登山者を犧牲にした名殘だともいはれてゐる。

湯は三ケ所より湧出する。

【泉質】 瀧の湯、強酸性泉。下の湯 中性の硫黄泉。其他、強酸性硫黄泉

〔特効〕 肺結核を最として呼吸器系、神經系、消化器系、生殖器系、泌尿器系の諸症。

【天然蒸汽浴場】 二十餘の噴氣孔に捻り藁をつめ、莚を敷いて坐臥し、病症によつて全身或は半身を温む。リウマチス、神經痛に卓効あり。

【旅館と經費】 組合の經營、八〇室、一日一圓半より三圓五十錢。自炊、五十五錢、一圓。毎日日用品の市場開かる。

開期は八十八夜より立冬まで冬期は閉鎖。

平泉のほとり

憶ひは八百年の昔にかへる。

鐵路の東、平泉館趾、伽羅御所趾を隔てゝ北上の洋々たる流れをみ、曲線柔らかき束稻山を仰ぎみるとき、四十余塔、三百餘房、櫻花芳芬の間に榮え輝きしとの傳へを憶ひ合せ、擬ひし京、東山のことも偲ばれて、東奥藤原父子の昂然たる意義も懷しみ偲ばるる。

古圖は、北上川は束稻山の裾を洗ふて流れ、今の流れとの間に諸士屋敷があり、御所は其西、富士山を擬し、平泉鎭護のため金の鷄像を埋めたと傳へらるゝ金鷄山を脊にしたところにあつたと傳へてゐるが、「秀衡の趾は田野になりて金鷄山のみ形を殘す」と芭蕉の筆が傳へてゐる樣に、北上の流れの變ると共に、泡沫と消え圃丘に青む春草を、憶出の便とするばかりである。

毛越寺より中尊寺

平泉驛より西五丁、嘉祥三年慈覺大師の開基にかゝるといひ、更に藤原父子の興した金剛王院醫王山毛越寺は、堂塔四十餘宇、禪房五百餘の經營と記さるゝのみで、雜草の繁るに委するのみである。貞觀十一年の昔には清和天皇の勅諚あつて、北門鎭護の御願寺たるべしとあり、長治年間には堀河天皇の勅願によつて清衡堂宇興造にかゝり、鳥羽天皇より圓隆寺の宣下をうけ、父子共々の心を盡しての營み、空しく兵燹にかゝりて烏有に歸し、今は只、大泉池畔、葭蘆繁る邊に規模宏壯の跡を徒に憶ひやるのみである。芭蕉の

夏草やつはものどもの夢のあと

の碑は池畔に立つて訪るゝものゝ心を過去へと誘ふ。柳櫻に彩られた平泉の經營振りを偲ぶこと

は創造の樂しみでもある。

達谷窟

毛越寺より西へ一里強、平泉村達谷にある。人力車、一圓二十五錢。

延曆二十年桓武天皇の御代、坂上田村麿、朝命を奉じて東征し、夷酋高丸惡路王は將軍の威に懼れ逃げ、遂に此の達谷窟に剪滅し、其報賽として八間四面の堂を此窟に建てたと傳へられてゐる。十餘丈の岩面には源頼義の圖したといふ大日像が刻まれてあり、毘沙門堂には慈覺大師作の多聞天百八體安置されてある。

こゝより一里程にして五串の瀧に至る。戻つて驛前より中曾寺へと道をとる。

【無量光院址】 驛前の國道を數丁北すると、金鶏山麓、老杉二株のもとに宇治平等院を模したといはるゝ無量光院址があつて、礎石庭石等を雜草の中に見出すことが出來る。

【鈴澤の池】 驛前より二丁程した國道の左側の田圃、鈴澤の池のあつたところとして地中に多

數の杭を見出さる。

【猫間淵址】 金鶏山と鐵路を挾んだ東北右側の一帶の低地が其址で、扇前と呼ぶ女房の身を投げてから、亡靈二十餘丈の大蛇となつて出たと云ふ。

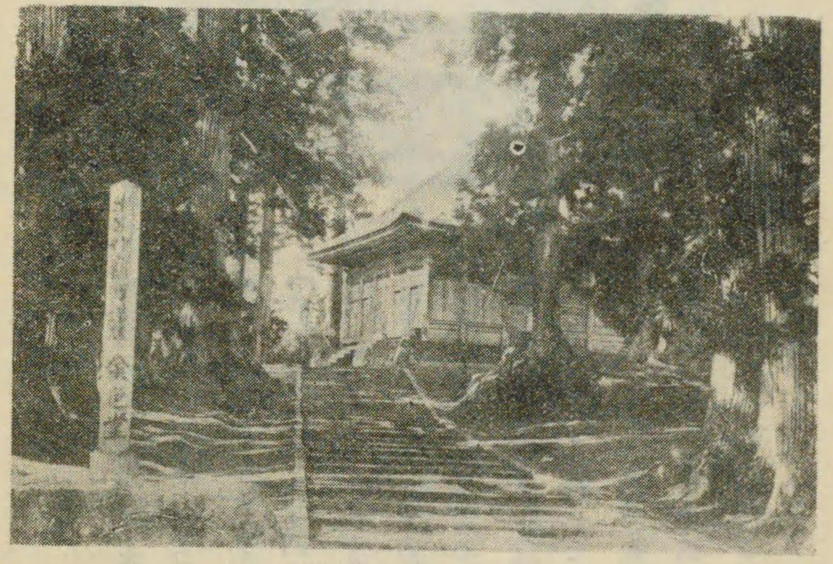
一字金輪佛

【柳の御所址】 猫間淵の東北、清衡初めて居館を築いたところ、今、北上の流れは冷くも底を洗ふてゐる。

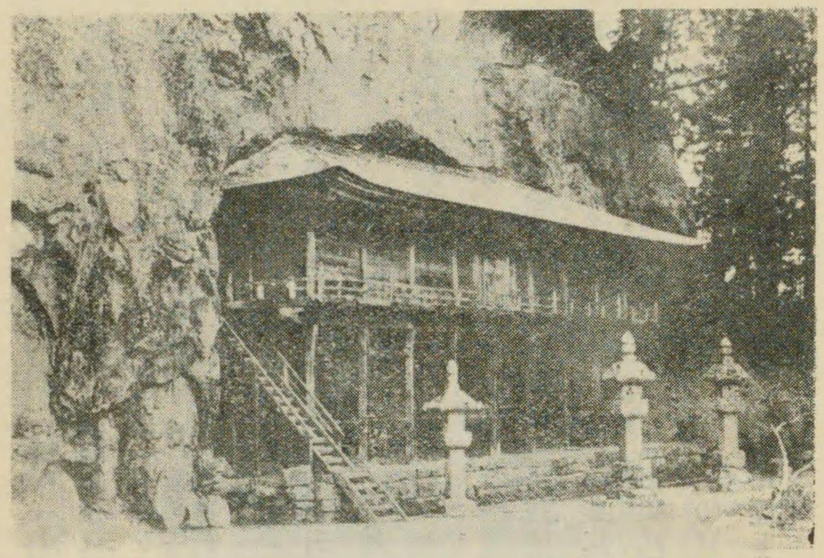
【判官館】 驛より七丁線路の右側に立つ丘陵がそれである。文治三年春、義經難を逃れ來つたとき秀衡此處に高館を築き庇保したのであつた。白旗神社といはる判官堂建つ。今は數十丈の斷崖の脚を北上川無心に洗ひ流してゐる。

【中尊寺】 高館の下を左に眞直に入ると、左に薄墨の櫻、右に關山中尊寺の碑が立つ。月見坂を登つて老杉欝蒼たる道を進めば、左側に辨慶堂建つ。地藏堂藥師堂を右左に見て、中尊寺本堂址前の門前に至る。仁明天皇の嘉祥三年慈覺大師の開基、弘臺壽院とも號され、淸和天皇の貞觀元年中尊寺の號を賜つたと傳へてゐる。又一說に天治三年の供養願文には檜皮葺金堂一宇、三重塔婆三基、二階瓦葺經藏一宇、二階鐘樓一宇、大門三宇其他云々とある如く、長治二年淸衡の創立によるものとも云はれ、二十一ケ年の長時日を要したと傳へられてゐる。

建武四年の野火延燒して大部分を燒滅し、僅に金色堂と經藏とを殘して藤原期の建築美を幽



金色堂



遠谷

に東奥に誇り示してゐるのである。

五月雨の降り殘してや光堂

の句に表はさるゝ如く

【金色堂】 奥まつた丘地老杉の見ゆるところに套室に覆はれた典雅な金色堂立つ。天仁二年鳥羽院の勅を奉じて淸衡の建立したるもの、天治元年の竣成まで十六ケ年を費してゐる。三間四面の寶形造、上下內外悉く遮羅布を以て蔽ひ黑漆を厚塗して金箔を貼したものである。

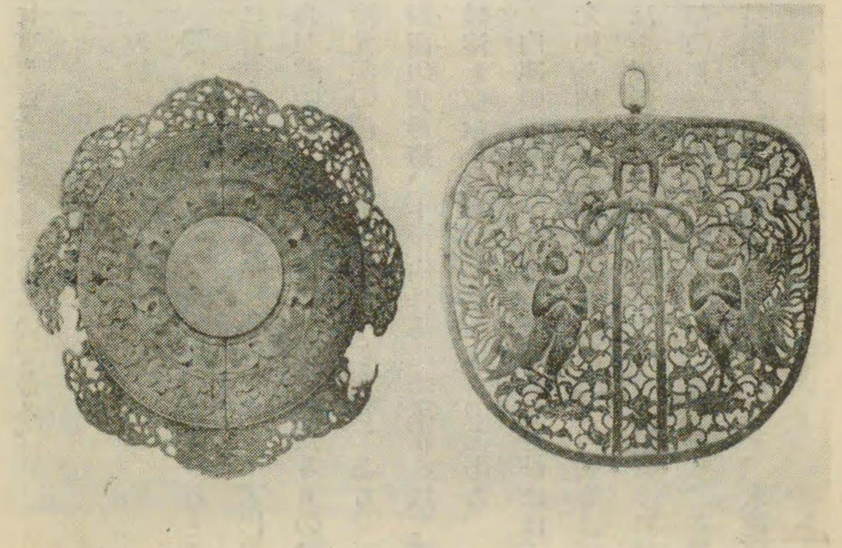
內陣の四隅に立つ七寶莊嚴の卷き柱には十二光佛を描き、長押、鴨居、蟇股壇勾欄等はいづれも螺鈿をもつて寶相花を表はし、壇上には定朝の作なる彌陀、勢至、觀音、六地藏、多聞天持國天を配し此の須彌壇の下にこそ、永遠の夢

549
396

を結ぶ、清衡、基衡、秀衡の遺骸が藏められてあるのである。遺骸は今尙元の形を壞さずとは明治三十六年大修繕の時傳へられた說である。中央清衡、左基衡、右秀衡とされた他に秀衡の棺側には子泉三郎忠衡の首桶がある。

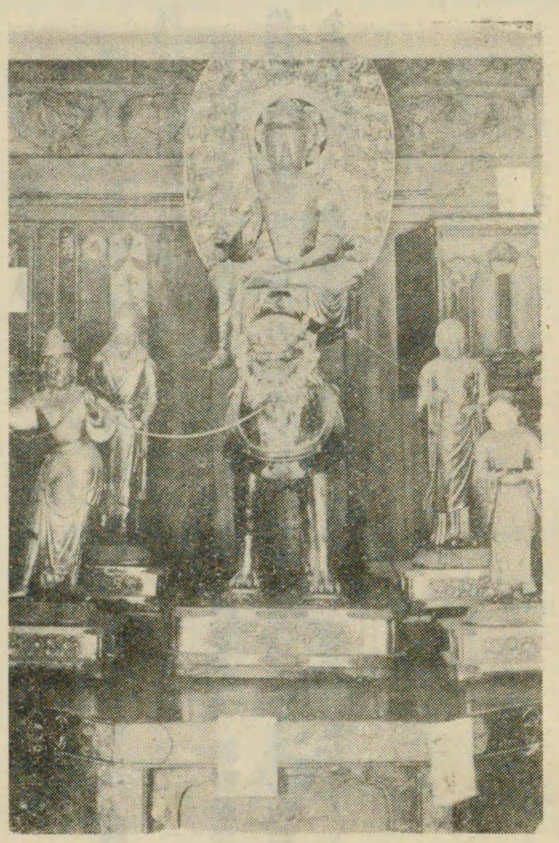
奏堂は、鎌倉將軍惟康親王が、舊觀を失はんことを憂ひて正應元年北條貞時に命じて建立したもので、爾後伊達家に於て屢々修繕を加へて來たのである。

【經藏】 金堂に向つて右方に建つ瀟洒簡素な瓦葺のがそれである。天仁元年清衡の建立と傳へられてゐる。元二階建であつたのが建武四年の野火に上層燒け失せて、今は方三間の寶形造として殘されてある。清衡奉納の一切經と基衡



華鬘　　天蓋

の納めた紺紙金泥の一切經と、黃紙宋版の一切經を藏めてあつたが大部散逸して經架なども空虛になつてるところが多い。今ある二百六十六箇の匣には、一々螺鈿で經文の題銘が印され經卷と共に國寶になつてゐる。中央佛壇は八角形をなして、獅子に駕した文珠菩薩像が安置されてある。烏羽天皇八才等身の像と稱され、毘首羯磨の作と傳へられてゐる。



經藏內部

此の他多數の國寶を有する。寶藏、峯藥師堂、大日堂、阿彌陀堂、鐘樓、辨財天堂等あり、心ある人の探るべきもの多々ある。雪に飾られた奧羽の脊稜山脈を遠く望み相對する北上の連山に想ひをいたし、東稱山の脚下北上の巨流悠暢迫らざるを見たならば、誰か想ひの

549
396

古今に走せざるものがあらうか。

拜觀料五十錢で、中尊寺一山、悉く見ることが出來、説明も聞かれる。

猊鼻溪　岩手縣東磐井郡長坂村

一ノ關より東四里三十丁、平泉より、山越えに三里。併し一ノ關より千厩行軌道によつて、行けば行步の難ははぶける。

猊鼻溪は東奥の耶馬溪として傳へられる大奇觀である、峭壁斷岩の豪壯感は水量の豐富さと相俟つて人を魅惑せずにはおかない。翠松綠樹の點綴るところ一幅の名畫をなしてゐる。鐘乳洞を探り、或は、奔流深潭の變化を味ひに來る文人墨客の數なか〳〵多い。

高級ビール
カスケード

549
396

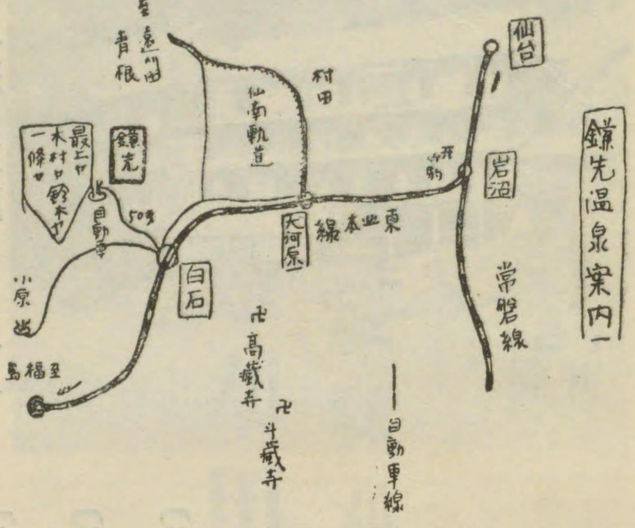
仙臺鐵道株式會社

仙臺市堤通九拾四番地

電話　本社一五五九番
　　通町驛一六五九番

宮城縣

鎌先溫泉



白石驛前ニ各支店アリ手荷物無賃運搬ス

東北本線白石驛ヨリ自動車二十分賃金五十錢

內湯旅館

一條旅館　白石支店　電四四番

木村屋旅館　白石支店　電一七番

最上屋旅館　白石支店　電　番

鈴木屋旅館　白石支店　電一六五番

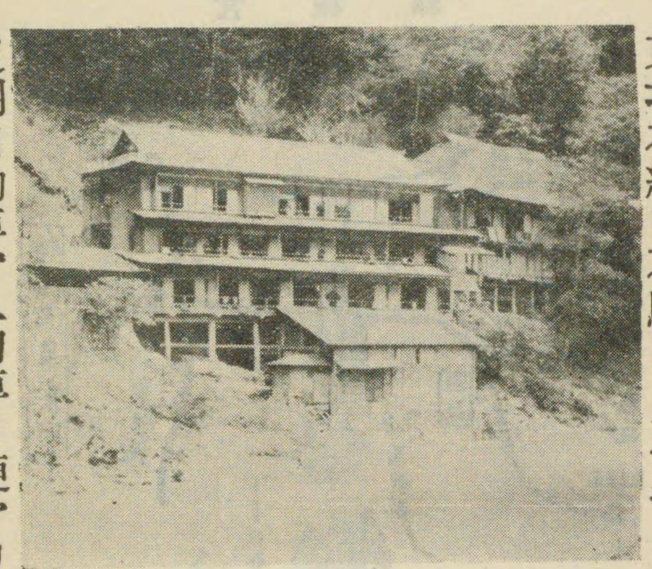
泉質　鹽類泉

効能　慢性消化器病　貧血症　腺病　慢性婦人病　慢性皮膚病　神經痛　癆痲質斯　打撲創傷　重病後の快復期

宿泊料　旅籠一泊金二圓五十錢（晝付）
　　自炊金一泊一圓三十錢位（食事共）

549
396

東北本線白石驛ヨリ三里
定期自動車、人力車ノ便アリ



〔泉　質〕鹽類泉、無色透明
〔効　能〕神經性諸病、婦人病、痔疾
〔特　効〕リウマチス

小原新湯
内湯旅館　**枕流閣**
宮城縣刈田郡小原村
電話ノ便アリ

開業六十年〔懇切鄭寧御客樣本位
自炊設備完備〕
自慢料理　鮮魚特ニ鮎（粕漬モアリ）
山鳥他諸鳥

溫泉卓効
内湯完備

宮城縣刈田郡
遠刈田溫泉組合

自動車軌道の便あり

549
390

日本百景

宮城縣青根溫泉
名號館
丹野七三郎

不忘館
岡崎稱吉

◇腦病眼病
◇神經衰弱
の靈泉

大自然の美觀○超俗の樂園
日本百景

◆一度來泉せる士は感歎して
天下無比の贊辭を惜しまざるべし◆

閑靜なる貸別壯貸切高等浴室の設備

◇東北本線大河原驛より省線連絡
軌道及び自動車にて一時間二十分白石驛より遠刈田まで自動車にて約一時間
宮城縣青根溫泉主
青嶺閣 丹野七兵衛

◇海拔二千四百尺金華山松島の風光座ながらにして双眸に入る
蚊帳不要

◇宿料低廉旅籠部自炊部の二樣外國人の宿泊及貸間は前約に應ず

◇腦病神經衰弱婦人病に特効

日本百景

絶勝無双
宮城縣青根溫泉湯守
不忘閣 佐藤仁右衛門
振替仙臺一〇三〇
電話話の便あり
溫泉卓効

營業科目
土木建築
工事請負
設計製圖
測量圖案

東京市芝區愛宕下町
四丁目一番地
東京復興工業所
江刺美三郎

549
396

陸前松島

松島ホテル　電話一九番

観月樓　電話一九番

白鷗樓　電話九番

松島驛前

同支店

陸前松島海岸五大堂前（電車終點前）

鐵道省指定旅館

東洋館　電話三番

鳴子溫泉

仙臺の產博御見物の御歸りには是非御寄り下さい（鳴子驛より二丁）

鐵道省御指定

鰻湯　瀧湯　横屋ホテル　電話五十五番

◇客室八十有餘

◇自炊旅籠兩樣

549
396

季節向の新柄と
精選せる地質
優秀なる技術と
細密なる裁縫

英佛國製絨販賣
高級洋服裁縫

淺野洋服店

店主 淺野喜作

仙臺市南町
電話二〇二番
振替仙臺四九三七番

營業科目

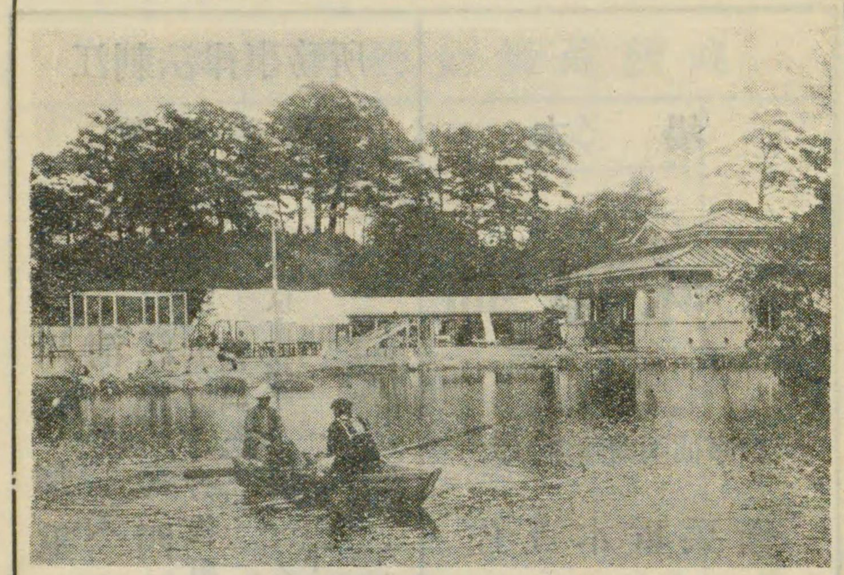
一、鑛山側量製圖
一、鑛業出願及登錄手續
一、鑛山地質又鑛床調査
一、岩石及鑛物鑑定
一、鑛山施設ノ計畫
一、鑛區賣買投資ノ紹介
一、鑛業法律質疑鑑定
一、其他鑛業ニ關スル一切ノ事項
一、陸地測量部發行地圖販賣
一、鑛業用火藥類一切

仙臺市片平町六拾九番
地電車道(裁判所隣)

佐藤鑛業事務所

從五位勳四等 佐藤寅松

電話二九四三番



宮城縣松島海岸

松島教育水族館

電話 二一六八番

549
396

江刺法律事務所

仙臺出張
（毎月一二固）

辯護士 川村彌重吉
辯護士 清水兵衛
辯護士 江刺喜四郎

自宅 赤坂區丹後町一
電話【長】青山一二二六

東京市銀座南鍋町一ノ三
（尾張町下車）
電話【特長】銀座一六一五
振替口座東京三一六八六

本場 仙臺味噌

大日本陸前國仙臺市
佐々木重兵衛

洋髪 美顔術 美裝術 生徒募集

（申込次第規則書進呈）

院長今般佛國巴里にて文部省認可の美容術學校を卒業歸朝し最も新らしき教授法にて御指導いたします。

東京女子美容藝術學院

ドクトルコワフール
佛國美容協會名譽會員 守屋祐章

東京市神田區猿樂町一ノ一
（御茶水通リ明大南隣）
（電話神田二六一六）

高級建築金物專門製作

スチユールサツシユ
ドアーの附屬品は是非弊所へ御用命を御願申ます

◇特徴◇

スチユールサツシユ。ドアー シヤツター ゲート
金庫扉 各種防水扉 スカイライトバー……の
附屬金物は何品に不拘 豐富に取揃へてあります
總てを常に
階段踏板手摺廻裝飾 銀行會社事務室 ドアー破損止
ドアー蹴板裝飾 其他歐風建築 ——防火建築內外の 裝飾金物一切
蝶番類 特に鐵製は弊社獨特の專門機械に依り如何なる厚物も舶來品以上に製作し得る自信を有し居ります

◉關西總代理店を設けました精々御引立の程を

スチユールサツシユ
ドアーの御製作を御參考となる好資料を豐富に取揃ひ置き御待受して居ります
新たに御創めの方は是非弊所へ御來店下さい。

大阪北堀西通五丁目 立賣 光村商店 電話三六新町五番 長番

東京市本所區北二葉町三十六番地
電話 三三二二 墨田四五六四番
渡邊製作所
振替東京 五一二九番

549
396

佐久間義和原著
宮城縣知事松平正直序
宮城縣書記官和達孚嘉跋

奥羽觀蹟聞老志 附補修篇

五〇〇頁 一金參圓也
送料 書留 貳拾八錢也

右ハ明治十六年九月宮城縣官版トシテ發刊シタル成本ニ據リ之ヲ參酌スルニ著者佐久間義和カ自筆ノ原本ヲ以テセルモノナリ抑本書ハ義和カ仙臺藩主第四世伊達綱村朝臣ノ命ヲ奉シ名所舊蹟等ヲ踏査考究ノ餘ニ成リタルヲ以テソノ等身ノ著書アル中ニ於テ最モ白眉ト稱セラレ鄉土史ノ大成シタルモノト謂フベシ本會ハ會員多數ノ希望ニ從ヒ發刊ニ著手シ尙之ニ併ハスルニ伊勢齊助氏ノ奥羽觀蹟聞老志補修篇ヲ以テシ合シテ二卷トナシ目下印刷中ニアリ本書ハ會員外ニモ頒讓スヘキ豫備トシテ增刊スルコトナルガ部數限リアルヲ以テ申込ノ順序ニ從ヒ之ヲ頒讓スルコトトナセリ故ニ其部數ニ充ルトキハ謝絕スルコトアルベシ請フ之ヲ諒セラレンコトヲ

仙臺市定禪寺通廿八番地
仙臺叢書刊行會
振替仙臺四六〇七番

Young Ken
Young Ken Barber Shop
理髮ヤングケン軒
京橋區元數寄屋町
對鶴ビルヂング一階
電銀一三九一
明治神宮外苑正門前

549
390

内科
脳脊髓神經（除精神病）
内分泌腺病
物理的治療
X線

福島病院

作 東島福 學士 醫博

本郷區丸山福山町一番地
（小石川柳町下車）
——電話小石川2157番——

549
396

内科
腦脊髓神經病

X線
物理的治療

内分泌腺病

福島病院

醫學士 福島東作

本郷區元山新山町一番地
（小石川櫻町下車）
——電話小石川2157番——

549
396

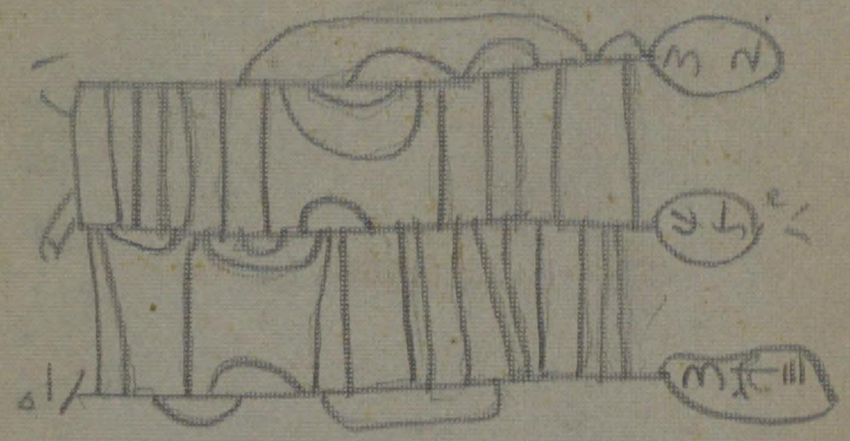
NO.

"F-M"
PAMPHLET BINDERS
are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thickness
851(菊倍)	30.cm.	x 22.5cm.	x 1cm.
852(四六倍)	26. ,,	x 18.5 ,,	x 1 ,,
853(菊)	22.5 ,,	x 15. ,,	x 1 ,,
854(四六)	18.5 ,,	x 12.5 ,,	x 1 ,,
855(特)	24. ,,	x 15. ,,	x 1 ,,

other sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES OF ALL KINDS
F. MAMIYA & CO.
OSAKA - TOKYO - FUKUOKA



昭和三年四月二十八日印刷
昭和三年五月一日發行

「宮城縣人」倍大號 特價金七拾錢
(第四卷第四號通卷第三十四號)

東京府高田町一五三二
編輯兼發行人 加藤清

東京市牛込區山吹町一九八
印刷所 宗文社

東京府高田町一五三二
發行所 宮城縣人社
振替口座東京七二四〇一

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black